

公開講座ダイジェスト2016

跡見学園女子大学公開講座の記録



公開講座ダイジェスト 2016 跡見学園女子大学公開講座の記録

刊行にあたって

跡見学園女子大学は、2 学部 7 学科体制となり、教員が提供できる講座の分野に大きな広がりを見せるに到った。平成 28 年度に開催されたテーマは、継続的に実施している語学、パソコン、くずし字の各コースに加え、歴史、ファッション、地域、映画など様々な分野を包摂し、好評を博している。

春期公開講座（新座）においては、「19 世紀日本の時代転換」と題し、維新の発端となった安政 5 年の政変、絵画史からみた転換期、民俗としての生活文化の発見について探求した。

春期公開講座（文京）は、「ファッション文化とライフスタイル」をテーマとし、ファッション雑誌の潮流、電子媒体としてのファッション誌の展望、企業行動としてのファッションブランドを取り上げた。

秋期公開講座（新座）では、「武蔵野の今と昔」を扱い、川越藩による地域開発、川越と河川交通・鉄道輸送、オランダ・カナダをモデルとする自転車利用の可能性、都市農業の展望、新座市と市民力など新座キャンパスに身近な題材を提示した。

秋期公開講座（文京）は「映画から考える文化表現」と題し、日本映画の展開、ヨーロッパ映画と文学表現、アメリカ映画の深さを訴えた。

次年度においては、さらに魅力的なテーマを模索し、公開講座の一層の進化を図る所存である。

平成 29 年 3 月

跡見学園女子大学

学長 山田 徹 雄

CONTENTS

刊行にあたって	跡見学園女子大学 学長 山田 徹雄	1
春期教養コース（新座キャンパス）	19世紀日本の時代転換：「近世」から「近代」へ	3
1. 維新の発端：安政5年政変を“悲劇”として読み解く	本学文学部人文学科教授 三谷 博	
2. 素朴という視点から見た絵画史の時代転換	本学文学部人文学科教授 矢島 新	4
3. 民俗の発見	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教授 鶴 理恵子	
春期教養コース（文京キャンパス）	ファッション文化とライフスタイル	5
1. 日本における、雑誌の歴史と女性ファッションの流れ	スタイリスト&ファッションディレクター 原 由美子	
2. ファッション情報伝達におけるインターネットと雑誌の役割	本学文学部現代文化表現学科教授 富川 淳子	6
3. ファッションブランドの社会貢献・文化貢献	本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科准教授 横井 由利	7
秋期教養コース（新座キャンパス）	武蔵野の今と昔 ―新座・三芳・川越―	8
1. 川越藩の新田開発と武蔵野ブーム	本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科教授 安島 博幸	
2. 新河岸川舟運と東上鉄道	本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科教授 老川 慶喜	9
3. 武蔵野を自転車で楽しむ ―オランダとカナダの自転車都市から学ぶ―	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 坪原 紳二	
4. 都市農業の役割を考える ―“暮らし”という観点から―	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教授 鶴 理恵子	10
5. 新座のまちづくり 市民力の活かし方	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 篠崎 健司	11
秋期教養コース（文京キャンパス）	映画から考える文化表現―現代文化表現学として―	12
1. 120年目の日本映画 ―過去と現在をつなぐもの―	本学文学部現代文化表現学科助教 渡邊 大輔	
2. ヨーロッパ映画と文学表現 ―新しい時間認識の発見―	本学文学部現代文化表現学科准教授 要 真理子	13
3. アメリカ映画の表現 ―見えるものから見えないものまで―	本学文学部現代文化表現学科教授 副島 善道	14
語学コース		15
英会話	責任講師：本学文学部コミュニケーション文化学科教授 奥田 洋子	
中国語会話	責任講師：本学文学部コミュニケーション文化学科教授 池上 貞子	16
朝鮮・韓国語国語会話	責任講師：本学文学部コミュニケーション文化学科講師 吉田 さち	17
くずし字読解コース	春期責任講師：本学文学部人文学科教授 泉 雅博	19
	秋期責任講師：本学文学部人文学科教授 岩田 秀行	
パソコンコース	春期講師（新座）：本学文学部人文学科准教授 福田 博同	21
	秋期講師（文京）：本学文学部現代文化表現学科准教授 伊藤 穰	22
受講生からのレポート		23
資料		29

公開講座春期教養コース（新座キャンパス）
19世紀日本の時代転換：「近世」から「近代」へ
平成28年5月14日～5月28日（毎週土曜日）
〈講座責任講師〉 本学文学部人文学科教授 三谷 博

平成28年度の公開講座春期教養コースは、新座キャンパスで、第1回は5月14日（三谷 博教授、文学部）、第2回は5月21日（矢島 新教授、文学部）、第3回は5月28日（靄 理恵子教授、観光コミュニティ学部）に行われた。いずれも土曜日の午後の1時間半である。全体としてのテーマは「19世紀日本の時代転換「近世」から「近代」へ」で、うち、三谷教授のテーマは「悲劇としての安政5年政変」、矢島教授のテーマは「素朴という視点から見た絵画史の時代転換」、靄教授のテーマは「民俗の発見」であった。

受講者数は97名で、アンケートには57名（約60%）の回答が寄せられた。回答者のうち、男女比は約3対1、年齢は60代以上が約75%であって、こうした公開講座の平均的な構成であった。初めての受講者は約25%で、リピーターが多く、5年以上の方も約23%あった。自宅からの所要時間が1時間以内という方が77%もいたことをみると、新座キャンパスの近所の固定客が多いのではなかろうか。無料の講座のせいもあって、地域還元の点で、しっかりと貢献できているのではないかと思われる。

受講後の感想は概ね良好で、各テーマに関心が寄せられ、啓発的だったとの評価がなされて、95%前後が再受講を望んでいた。ただし、講義側への注文もあり、やや難しかったとか、言葉が聞き取りにくかったとか、講義時間をもう少し長目に、あるいは回数を増してほしいとか、テーマを絞り、スライドを多用して分かりやすくしてほしいとか、跡見の学生も受講すれば熱気が充満してもっと楽しくなるのではないかと言った提言があった。

＜第1回 5月14日＞

維新の発端：

安政5年政変を“悲劇”として読み解く
本学文学部人文学科教授 三谷 博

明治維新における政治動乱の発端を開いた「安政5年政変」を、フィクションとしての悲劇のドラマツルギーを参照しつつ、読み解いてみた。初めに1853年のペリー来航から1890年の帝国議会開設に至る維新の過程を振り返り、その中で安政5年政変が「対立が対立を呼ぶ」悪循環を呼び起こして政治体制の崩壊を招来したことを指摘し、それを読み解く一助として、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』のような「意志と偶然の交錯」というモデルを使い、それが個々人の「意志を超えたものの支配」を結果したという見通しを示した。本論では、この政変に鎖国の放棄と将軍継嗣の選定という2つの争点があったことを指摘した後、以後の政治過程を5幕の悲劇仕立てで辿った。第1幕としては江戸における一橋擁立派の大奥入説、第2幕として京都における2問題の交錯と「水戸陰謀」論の発生、第3幕として江戸での井伊大老登場とアメリカ使節の闖入、一橋党の不時登城と処罰、第4幕として天皇と水戸家臣の抗議、京都での弾圧開始、関係者への断獄、第5幕として反対派のテロリズムへの訴えを取り上げた。結論では、1) この政変のような悪循環を防ぐにはどうすべきかを問い、ハリスが最悪のタイミングで条約調印を強請しなかったらとか、一方に陰謀観が生まれなかったらとか、厳罰を回避していたらどうなったかとか、反事実的な可能性を考え、2) 結果としては破局自体が体制の安定していた時期には

想像不可能だった「天下の公論」や「王政復古」といった可能性を新たに開いたことを示し、さらに3) フィクションとしての悲劇と異なり、現実の悲劇ではカタルシスは生じず、舞台と観客の間の境界も存在しないことを指摘して、講演を結んだ。

<第2回 5月21日>

素朴という視点から見た絵画史の時代転換

本学文学部人文学科教授 矢島 新

時代転換をテーマにした連続講座の一回分として江戸時代から大正時代にかけての絵画史を講じた。素朴をキーワードに江戸・明治・大正の三つの時代の絵画史を分析することで、日本美術の流れや特質を論じようとした。日本美術史の大きな特色の一つである素朴な表現は講師の専門とする分野であるので、かえって話す内容の取舍選択に迷ったが、多くの方になじみがあり、理解しやすいと考えられる明治維新の以前と以後に論点を絞り、両者を対比的に論じることにした。学習意欲にあふれる方々が対象なのでやや高度な内容にしたが、真剣に聞いていただけたと感じている。

<第3回 5月28日>

民俗の発見

本学観光コミュニティ学部

コミュニティデザイン学科教授 靄 理恵子

日本民俗学は、フィールドワーク（現地調査）を通して当該社会に暮らす人々の生活文化の記述・分析を行い、それぞれの意味・構造や機能・しくみ等を解明する学問とされる。柳田國男（1875－1962）は日本民俗学の父とされ、その萌芽は柳田が1908年（明治41）、3ヶ月にわたる九州の視察旅行で、山村や離島を訪れ地方農山村の実態に触れ、特に宮崎県椎葉村に1週間滞在し見聞きした狩猟と焼畑耕作に大きな示唆を受けたこと、翌1909

年にそれらをまとめた『後狩詞記（のちのかりことばのき）』が刊行されたことに求めることが多い。

本講座では上記のことをふまえつつ、しかし、柳田以前の江戸初期から民俗学の萌芽が様々にあったことを紹介した。

近世初期、文字を独占した武士や町人が他者として農村の百姓を観察し、珍しい生活、変わった生活を発見、興味を抱くようになる。武士や町人を中心に旅が頻繁に行われるようになり、旅先での見聞を書き残す紀行文が増えていく。当初は、名所めぐり、古典文学に登場する故地訪問、風景を愛でる等が大半で、地域の生活に関心を示す紀行文はわずかであった。その後、近世後期にかけて多くの紀行文が編まれ、民俗に関わる記述も増えていく。

民俗の発見は、他者の民俗への関心から始まった。自分たちの生活とは異なる世界を知る。好奇心に基づく観察を行う。その過程で自分たちとの相違に注目し、その意味を見出す。生活世界への関心の深まりである。自らの生産技術の観察と記録を通して各地で農書が多数刊行される。そのほか、妖怪・化け物・怪談・怪異、死後の世界の経験等への強い関心等、不思議な現象への関心と共に、実際に起こったその不思議を記録しようという姿勢も強まる。この庶民の感性への着目は、民俗の外形と心意とを結びつけるものであり、世相風俗を底で規定している社会心理への接近を可能にしていた。

近世から近代へ（江戸から明治へ）の転換期に、民俗は「発見」された。以来今日まで、民俗の中身は変化しつつも、人々の暮らしを捉える方法・学問として存在している。

公開講座春期教養コース（文京キャンパス）

ファッション文化とライフスタイル

平成 28 年 6 月 4 日～6 月 18 日（毎週土曜日）

〈講座責任講師〉 本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科准教授 横井 由利

平成 28 年度春学期の教養コースの公開講座は、『ファッション文化とライフスタイル』をテーマに、6 月 4 日（土）、6 月 11 日（土）、6 月 18 日（土）文京キャンパスにて開催した。スタイリストとして活躍中の原由美子、本校の現代文化表現学科の富川淳子、生活環境マネジメント学科の横井由利の 3 名が講師を務めた。

原由美子は、70 年代以降に創刊されたファッション誌に関わり、創刊された時代背景とファッションの関係を振り返った。原が作るファッションページをリアルタイムで目に見ていた半数以上の受講者は、親近感を覚えた様子で、講義が終わった後も質問が続出した。富川淳子が担当した 2 回目は、デジタルと紙媒体を両立させようとする出版業界の現在について、ファッション文化を伝える媒体としての電子書籍の可能性を中心に、これからの出版界のあり方を説いた。3 回目の横井由利は、ラグジュアリーブランドが取り組む社会貢献と文化貢献の現状を中心に講義し、ラグジュアリーブランドが運営するアートの展示会やコンサートなど、聴講者が活用できる情報を告知する 2 部構成とした。

ファッションを切り口とする初めての試みとなった公開講座のアンケートでは、約半数が初めて受講したという結果が出た。全体では 60、70 歳代の受講者が 50%と圧倒的に多いものの、20、30 歳代が 30%（原由美子の回では 20 歳代が 2 番目に受講者数が多い）という結果が出ており当初の新規開拓と聴講者の若返りという目標は、達成することができたのではないと思う。また前年秋学期の受講者数より 10 名増という結果も見逃せない。

レジュメの配布を希望する受講者がいらし

たが、雑誌のファッションページやブランドに関わるビジュアルに関しては、許諾の問題があり、すべてを資料とすることはできなかった。ファッション関連の講座を開講する場合は、文字情報のみ、もしくは講師が写した写真を使用したレジュメの制作することにした。

教員が大学でおこなう講義に加え、今回のように外部講師を招き、体験談や実践例に基づいた講義を増やすことで「ためになり、使える講座」という評価を得る仕組みを考えていきたいと思った。

＜第 1 回 6 月 4 日＞

日本における、雑誌の歴史と

女性ファッションの流れ

スタイリスト&ファッションディレクター

原 由美子

私が雑誌の仕事を始めた時期は、ファッションや雑誌に変化が訪れた時代でした。ファッションの変化とともに関わる雑誌も変わりました。講義ではその変遷を講義しました。

最初に関わった雑誌は平凡出版社（現マガジンハウス）が、1970 年に創刊した『アンアン』でした。『アンアン』はフランスのファッション誌『エル』との提携誌で、フランス版の記事を翻訳するのが最初の仕事でした。その頃パリのモード界では、オートクチュールからプレタポルテの時代へ移り、洋服はオーダーするものから既製服を買う時代になりました。日本のファッション誌も『アンアン』以前は、どこも付録に型紙が付いていましたが、プレタポルテの時代とともに創刊した『アンアン』には型紙は付いていませんでした。

74 年から始めた『婦人公論』の仕事では、大人の女性が着やすいハイファッションを提案しました。77 年にマガジンハウスより創刊した『クロワッサン』では、別冊で『原由美子の世界』を春夏と秋冬号を発刊し、当時注目する女性とそのファッションを提案し、成熟した大人の美しさやモードの世界へ近づくことができました。『クロワッサン』では男性のスタイリングも手がけ、男性は自分のスタイルを崩さない方がいらっしゃり、用意した服を着ていただくのに苦労したこともありました。男性の聴講者に向けて少しだけ男性誌に掲載されたものも含めました。

後半は『エル・ジャポン』『マリ クレール・ジャポン』『フィガロ・ジャポン』といったフランスの提携誌との関わりです。パリコレが最も活気がある時代でしたので、海外ロケに出かけては、ファッションの楽しさを伝えることに終始した時代でした。

2000 年になると小学館の『和楽』で、日本の文化と洋服の融合をテーマに連載していました。日本文化を見直す傾向が、ファッション界にも芽生えていた頃でした。現在は着物のページを『フィガロ・ジャポン』で連載しているのですが、これは初心者を含めたきものに関心のある人たちを対象に季節に関するきものしきたりと、帯の組み合わせを提案しています。日本の民族衣装であるきものが廃れてほしくないと考えているので。

公開講座のアンケートを見せていただきましたが、パワーポイントの資料をプリントアウトしたものをいただきましたかというご意見もありました。使用した写真は、特別に使用許可をいただいたもので、聴講者の方にお配りすることはできないことをご理解いただけたらと思いました。

<第2回 6月11日>

ファッション情報伝達における

インターネットと雑誌の役割

本学文学部現代文化表現学科教授 富川 淳子

総務省発表の最新の通信利用動向調査ではインターネット人口普及率は82.8%、それに対し雑誌の売り上げは1997年以後、17年連続の減少が報告されている。にもかかわらず、「ファッションの流行の情報源」を消費者に尋ねた調査では、複数の調査において第1位はファッション誌という結果になっている。なぜ、ファッションの流行の情報源は紙メディアなのか。この答えを考察することを目的に「ファッション情報伝達におけるインターネットと雑誌の役割」というテーマで講義を行った。

まずはこの講義の前提となるインターネット社会においてもファッションの流行の情報源がファッション誌であるというデータを示した。その上で電子書籍と電子雑誌というデジタルメディアと紙の雑誌の魅力の比較を試みた。次いでファッションの流行の発信源が世界4大コレクションと呼ばれる、NY、ロンドン、ミラノ、パリのプレタポルテのコレクションであることを説明。その情報がファッションサイトで紹介される場合とファッション誌に掲載される違いを具体的に2016年春夏のコレクション情報を例に挙げて紹介した。

ファッション誌は雑誌の中でも特にターゲットとコンセプトが細分化され、それがファッションページに明確に表現されるメディアである。従ってファッション誌に掲載される情報はターゲットである読者にとって、わかりやすく、かつ求めている情報といえる。つまり情報をターゲットに合わせて編集するという雑誌の特性が、ファッションの流行情報源はファッション誌という関係を築き上げているのである。そして、これはターゲット設定が幅広く、情報を羅列するだけのファッ

ョンサイトではできないということを説明した。

ファッションは生活に密着した身近なトピックスであり、文化という意識を持ちにくい領域といえるであろう。従ってファッションをテーマにしたこの講義において、できる限りデータを示し、具体例を挙げて説明するよう心がけた。ファッションは文化であること、雑誌とインターネットの情報の質は異なることを認識していただける機会となったら本望である。

＜第3回 6月18日＞

ファッションブランドの社会貢献・文化貢献

本学マネジメント学部

生活環境マネジメント学科准教授 横井 由利

近年「サステイナブル」(持続可能な)という言葉を目にするようになってきた。「サステイナブル」とは、地球環境を保ちながら持続可能な産業の発展と開発を目指そうという考え方だ。ファッション界においても、サステイナブルの考えを理念とする企業が増えている。自然がもたらす恩恵に感謝し、職人の伝統を受け継ぐラグジュアリーブランドは、まさに持続可能な企業のあり方の一端がうかがえる。ファストファッションもまた違う方法論を用いてサステイナブルな企業を目指しているのも確かだ。いずれにせよ持続可能な世界を形成するためには、利益を追求するだけの企業から、社会の利益に資する社会貢献を行い、社会的な責任を果たす企業のあり方が求められる時代になってきたのだ。そこでこの講座は、ファッションブランドの中でも、ラグジュアリーブランドが行っている貢献について絞り込み論じた。

チャリティやボランティアを中心としたアメリカ型の社会貢献とは一線を画す、ヨーロッパ型貢献のひとつ、ルネサンス以来、多くの芸術家を支援してきたパトロネージュの精

神にスポットを当て、ラグジュアリーブランドが文化貢献に力をいれる理由を示すことにした。ラグジュアリーブランドの多くは現在のパトロンとなり、ペインター、フォトグラファー、ミュージシャン、ダンサーなど芸術に携わる人々への支援を続けている。それは、芸術家の先見性がブランドのクリエイティビティに影響を与え、ブランドを持続する「伝統と革新」の力となるからである。

講義では理論に加え、実用的な情報を盛り込み「ためになり使える講義」にすることにした。具体的には、銀座メゾンエルメスのアートスペース「フォーラム」やシネマスペース、銀座シャネルの「ネクサスホール」で行われるコンサートや写真展、表参道ルイ・ヴィトンのアートスペース「エスパス ルイ・ヴィトン」などの活動を紹介した。いずれも、芸術家への支援とともに、入場無料で見学できるため消費者に向けた文化貢献であることも解説した。

実用情報は、一覧にして配布すればより有用な講義になったのではないかと思った。

公開講座秋期教養コース（新座キャンパス）

武蔵野の今と昔 ―新座・三芳・川越―

平成 28 年 10 月 8 日～11 月 12 日（11 月 5 日は除く）（毎週土曜日）

〈講座責任講師〉 本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科教授 安島 博幸

本学がある新座市から川越市にかけての一帯は、川越藩の領地であり、江戸の初期から、新田開発が進んだ場所である。川越藩主松平信綱の時代に、現在の新座市にあたる野火止開発が行われ、続いて、三芳町、所沢市へ広がる三富新田の開発が行われ、不毛の大地は、実り豊かな土地に変わっていった。また、農作物を集散地である川越から江戸に運ぶため、新河岸川の水運や街道の整備も行われた。明治に入ると、西欧の文化や文明がもたらされ、「武蔵野ブーム」が起き、鉄道の敷設とも相まって、地域に大きな変化をもたらしていく。

この地域に起きた出来事を歴史的に概観し、その遺産を現在の暮らしの中に活かしていくために、様々な視角から論じることを今年度の公開講座の目的にしており、以下はその概要である。

安島は、第 1 回「川越藩の新田開発と武蔵野ブーム」の中で、川越藩の新田開発が武蔵野ブームにつながっていく様子を歴史的な資料をもとに明らかにしている。

老川は、第 2 回「新河岸川舟運と東上鉄道」の中で、新河岸川舟運の役割とそれに代わる東京と川越を結ぶ多くの鉄道計画の存在とそれが東武鉄道東上線としてまとまっていく過程を論じている。

坪原は、第 3 回「武蔵野を自転車で楽しむーオランダとカナダの自転車都市から学ぶー」において、武蔵野の風景をより楽しむために自転車の導入を提案し、先進国であるカナダやオランダの自転車と車が共存する道路や自転車に適したネットワークの提案を行った。

鶴は、第 4 回「都市農業の役割を考えるー“暮らし”という観点からー」において、明

治以降の都市近郊農村の風景や生活様式の変化の中に登場した武蔵野の都市農業の新たな動きを暮らしの視点から見直して論じた。

篠崎は、第 5 回「新座のまちづくり 市民力の活かし方」において、歴史や文化を活かしたまちづくりに成功するためには、市民の協働や ICT を活用した人材募集、クラウドファンディングなど新たな資金の確保方策が必要であることを事例にもとづいて紹介した。

＜第 1 回 10 月 8 日＞

川越藩の新田開発と武蔵野ブーム

本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科

教授 安島 博幸

本学のある新座市は、江戸時代初期に川越藩により、新田開発が行われ、不毛の大地は豊かな実りをもたらす穀倉地帯へと変革を遂げた。その開発を指揮したのは、松平伊豆守信綱である。信綱は、島原の乱を平定した功績により、川越藩主に任ぜられた。才知に溢れた人物で「知恵伊豆」と呼ばれていた。信綱は、新田開発ばかりではなく、川越と江戸を結ぶ新河岸川の水運、川越街道の整備を行い、発展の基礎を築いたことでも知られている。

また、江戸に生活用水を供給する玉川上水の開削を指揮し、成功しており、その功績により、玉川上水を流れる水の 3 割を分けてもらい、野火止用水を開削した。この野火止用水により、現在の新座市周辺で新田開発を行うことが可能になったのである。

この野火止開発の成功の後、松平家の後に、川越藩主となった柳沢吉保は、現在の三芳町にある「三富新田」の開発を行っている。「三

富新田」には、いまでも中国・北宋時代の王安石の改革にならったと言われる新田開発の形が良く残り、世界農業遺産への登録も目指している。

このような新田開発の風景は、明治時代になっても良く残されていた。そこへ明治維新後、西欧の風景観・自然観がもたらされ、武蔵野の美が発見されることになった。その大きな引き金になったのが、国木田独歩による短編小説『武蔵野』である。『武蔵野』が出版されるや教養人の間に武蔵野ブームが巻き起こり、武蔵野台地一帯において、住宅地化が進み、別荘が建てられ、行楽の場となった。そして、武蔵野の風景の中心は、川越藩の新田開発を先導した松平信綱が葬られている平林寺の周辺だった。武蔵野ブームとその影響は、第二次世界大戦後まで続くことになる。

<第2回 10月15日>

新河岸川舟運と東上鉄道

**本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科
教授 老川 慶喜**

川越がいつから「小江戸」と呼ばれるようになったかは定かでないが、江戸期には新河岸川舟運で江戸と結ばれ、物資の集散地として栄えていた。そのため、1895（明治28）年に川越から入間川や所沢を経て甲武鉄道（現・JR 中央線）の国分寺に至る川越鉄道（現・西武新宿線）が開業したさい、川越の商人たちは同鉄道が川越とは関わりがないという声明を出した。川越鉄道は、川越の商圈を脅かすものと考えられていたのである。

しかし、だからといって川越の商人たちが鉄道敷設に消極的であったというわけではない。彼らは、日本鉄道会社（上野～青森間、1891年全通）にはそれなりの出資をしているし、吾孫子～川越間の鉄道敷設を請願もした。また、川越鉄道の開業によって、入間川や所沢が集散地として成長してくると、現在の東

武東上線のルートにほぼ匹敵する東京の池袋と川越を結ぶ京越鉄道の敷設を計画したのである。

京越鉄道は実現には至らなかったが、やがて1914（大正3）年に東上鉄道が池袋～川越間を開業した。東上鉄道の敷設をめぐっては、志木町（新河岸川舟運）と大和田町（川越街道）とで路線の誘致争いが展開された。また、東上鉄道の開業にあたっては、江戸期から新河岸川の志木河岸で河岸問屋を営んできた井下田慶十郎が、鉄道時代に移りつつある時代を見据えて、東上鉄道の敷設を推進していったことが興味深い。

東上鉄道が開業すると池袋～川越間は1時間ほどで結ばれ、新河岸川舟運は衰退に向かった。また、東上鉄道の開業によって川越には川越鉄道、川越電気鉄道、東上鉄道の3駅が併存するようになった。1920（大正9）年、東上鉄道と東武鉄道は合併し東武鉄道東上線となった。両鉄道の社長であった根津嘉一郎が経営の合理化を図ったのである。そして1931（昭和6）、新河岸川の河川改修が完了すると、最終的に新河岸川舟運の命脈が切れた。

<第3回 10月22日>

武蔵野を自転車で楽しむ

一オランダとカナダの自転車都市から学ぶー

本学観光コミュニティ学部

コミュニティデザイン学科准教授 坪原 紳二

国木田独歩が『武蔵野』を執筆した当時、平林寺周辺や三富新田には広大な雑木林が分布していました。1950年代以降の高度経済成長の過程でそれらは激減してしまいましたが、それでも、新座市や三芳町にはまだまだ豊かな緑が残されており、自転車を使い、事前にルートを計画して回れば、豊かな緑に出会うことができます。

問題は、せっかく武蔵野のかつての風景がまだ残されているのに、それらを自転車で楽

しむための道の整備が十分ではないことです。とりわけ埼玉県のこの辺りはトラックやダンブが多く、自転車で走るのは怖いような道もしばしばあります。では、自転車で走りやすくするためには、道路をどのようにデザインしたら良いのでしょうか。

理想は、車道と縁石や柵で物理的に分離された自転車道を作ることです。しかし既成市街地で安全で、かつ並走を許すような自転車道を作るためには、一方通行とし、幅員は最低 2m が必要です。線で分けただけの自転車レーンならそんなに幅員を要しないと思われがちですが、オランダでは、安全上からレーンでも最低 1.7m の幅を確保することが求められています。つまり自転車道、さらにレーンでも、安全で楽しく走れる自転車走行空間とするには相当な幅員が必要で、日本の狭い道路に埋め込むことはなかなか難しいわけです。

そこで今日ご紹介したいのが、カナダのバンクーバー市、及びオランダの各市が近年盛んに整備している、自転車優先の下で、自転車と車の共存を図る道路です。とりわけオランダの「自転車通り」は、自転車・車の走行空間をあえて狭くして自転車がドライバーの視界の正面に来るようにし、安易な車による自転車の追い越しを抑制しています。車道幅員 4m 程度の所でも導入しており、日本でも空間的には十分適用可能だと思います。

武蔵野の地でも、自治体は緑のネットワーク化を計画に掲げています。みなさんと一緒に武蔵野の緑資源を発掘し、海外の事例に学びながら、自転車走行空間のネットワークを提案したいと思っています。

<第4回 10月29日>

都市農業の役割を考える

―“暮らし”という観点から―

本学観光コミュニティ学部

コミュニティデザイン学科教授 靄 理恵子

講座では、明治以降の都市近郊農村の変化の概要を掴むと共に、現代日本社会において都市農業が果たす役割について“暮らし”の観点から考えた。具体的には、朝霞市の都市化の状況、JA あさかの農業体験プロジェクト、東京都練馬区の農業体験型市民農園（「練馬方式」）等の事例について、写真を交えて紹介した。

明治以降、鉄道の敷設と沿線の開発により武蔵野の景観は大きく変貌した。特に高度経済成長期以降、都市化の波が押し寄せる中、急激な人口増と農家・農業者・農地の減少、都市的生活様式や都市の人間関係が広がった。混住化による旧住民と新住民の軋轢や葛藤は、旧住民である農家にとっては物理的な生産環境悪化に加え、農業者としてのアイデンティティの危機も経験することになった。

こうして都市の農家の多くは、地域では「点的存在」となり、孤立していった。しかし、それゆえに様々な模索もなされ、地域外の農家とのネットワーク構築や消費者との積極的なつながりを創出する農家が出てきた。また、保育園や幼稚園、小学校、地域住民とのつながりを構築する中で、地域にとってなくてはならない存在となっている事例も多い。

こうした動きは、2000 年代に入る頃から、都市農業が多様な機能を果たしているとして注目されるようになってきた。農産物生産機能に加え、防災、交流・レクリエーション、教育・学習・体験、ヒートアイランド現象の緩和、癒やし・リフレッシュ、景観形成、自然環境保全機能等である。

異なる文化を持つ者同士の交流は、互いの文化を変える契機になり、それを「文化変容」

というが、まさに農家との交流は、さまざまな学びの場として農作物や農業だけでなく、食、農、暮らし、社会のありかた等を根底からそれぞれの足元から問い直す契機になっているのである。

効率性や経済合理性の追求を最優先とする近代農業とは違う、“暮らし”の観点から都市農業を眺めると、上記のようなさまざまなものが見えてくる。

＜第5回 11月12日＞

新座のまちづくり 市民力の活かし方

本学観光コミュニティ学部

コミュニティデザイン学科准教授 篠崎 健司

武蔵野（新座・三芳・川越）の魅力ある資源を活かし、さらに後世に残すためにはどうすればよいのかを考えるための講座とした。その一方策として、各地域の取り組みを通して市民力、地域力によるまちづくりのあり方を提案した。

先進事例として川越や千葉県佐原のまちづくりを概観し、例えば佐原のまちづくりでは、もともと町衆による自治が行われていたことから、社会的な協働が成立しており、結果、誰か突出したリーダーが引っ張るのではなく、地域の合意形成を大事にしながら、一人一人が納得して参加するというスタイルが形成されていることなどを示した。

これら川越や佐原のまちづくりから見えてくるものは、中核となる市民活動グループの存在であり、一律のルールづくりではなく、住民による住んでいる人の立場に立った、ソフトな規範づくり、すなわち住民が納得をしながら、条件が整ったところから進めていくというやり方であったと示した。

ここで、武蔵野（新座・三芳・川越）周辺の市民活動の実態を見ると、福祉、生涯学習、環境といった分野の市民活動が盛んであり、生涯学習や教育という広い意味での教育分野

も多いという特徴があった。そこで、学校と地域の連携という視点で参考となる東京都三鷹市の取り組みを紹介した。三鷹市のこの取り組みを支えているのは、保護者や地域の人であり、例えばこの学校支援ボランティアに参加している人は年間で約2万人弱といわれ、三鷹市の小・中学校の子ども数を大きく上回っている。こうした取り組みの結果、中学生の不登校が半減し成績も向上している。

このように多くの市民が参加していく形こそが重要であり、最近ではインターネットで広く情報発信し、市民が抱える課題を見える化し、地域の中から知恵や人材、資金を集めて解決するというような課題解決のプラットフォームが誕生し機能しつつあることも紹介した。特に資金確保についてはクラウドファンディングを紹介し、これらをうまく活用することで市民力や地域力を高めながら、より多くの一般の市民活動がその実行力を増していけるのではないかと提案した。

公開講座秋期教養コース（文京キャンパス）
映画から考える文化表現 ―現代文化表現学として―
平成 28 年 12 月 3 日～12 月 17 日 （毎週土曜日）
〈講座責任講師〉 本学文学部現代文化表現学科助教 渡邊大輔

2016 年度の文京キャンパス公開講座秋期教養コースでは、講座タイトルを「映画から考える文化表現―現代文化表現学として―」として、「映画」を主題とした本学科教員 3 名による全 3 回の連続講座を実施した。また、各回で扱う対象地域を分担し、第 1 回は「日本映画」、第 2 回は「ヨーロッパ映画」、第 3 回は「アメリカ映画」を対象とした。

第 1 回では、日本映画史の歩みを広く視野に入れつつ、中でも 1950 年代半ばの「太陽族映画」と呼ばれる戦後世代の青春映画ジャンルの持つ歴史的意義を紹介した。第 2 回では、ヴァージニア・ウルフの小説『ダロウェイ夫人』とその近年の映画化作品とを比較対照しながら、物語映画の草創期にウルフが先駆的に試みていた、直線的な時間認識とは異なる、――「映画的」とも形容しうるような――非人称的な時間認識の叙述表現を解説した。さらに第 3 回では、映画という近代芸術を孕む可能性を、芸術学の観点から文学、音楽などの諸芸術との比較を踏まえて広く捉え直し、古今のアメリカ映画の具体的な演出を縦横に参照しながら、映画における空間的な推移や移動の演出が、同時に「時間の進行」の暗示的機能をも果たするという映画表現の固有性を明らかにした。

3 名の担当者は、等しく映画を扱いながらも、それぞれ日本映画史、モダニズム文学、美学・芸術学と、アプローチは多様である。とはいえ、総じて全 3 回の講座が試みたのは、第一に、映画という 20 世紀を象徴する新たな表象メディアが現代の芸術形式にもたらした画期の解明であり、また第二に、その意義の分析にあたって、小説や時間芸術といった他の芸術形式との比較作業の有効性を伝えるこ

とであった、とまとめることができるのではないだろうか。

各回、70 人前後の参加者があった他、講座の終了後には多数の質疑が寄せられるなど、連続講座としては一定の成果を収められたと思われる。本公開講座を契機として、「現代文化表現学」の研究活動をより充実させていくことが今後の課題となるだろう。

＜第 1 回 12 月 3 日＞

120 年目の日本映画

―過去と現在をつなぐもの―
本学文学部現代文化表現学科助教 渡邊 大輔

秋期教養コース第 1 回の担当者として、筆者は、副題を“120 年目の日本映画 ―過去と現在をつなぐもの―”として、「日本映画」を題材に講座を構成した。そこでは主に 1950 年代のいわゆる「太陽族映画」を取り上げて、日本映画史研究や文化社会学の方法を踏まえつつ、当該ジャンルの映画史的な再評価の可能性について報告した。

まず講座全体の端緒として据えたのが、講座を開催した 2016 年が、日本に映画が渡来して 120 年目という節目の年であるという話題である。この歴史的な指標を設定することで、日本映画史全体のパースペクティブを初学者にも把握しやすいように配慮した。

続いて今回の講座の本題である、1950 年代の日本映画の概況を説明した上で、「太陽族映画」について解説した。知られるように、太陽族映画とは、もとより、小説家の石原慎太郎（1932- ）が 56 年、一橋大学在学中に発表し、当時史上最年少で第 34 回芥川賞を受賞した小説『太陽の季節』、及び同年の日活によ

る映画化が契機となって 56 年に相次いで製作された、石原原作の、戦後世代の若者たちの無軌道な風俗を煽情的に描いた一連の青春映画を指す。筆者が今回、この太陽族映画を取り上げたのは、50 年代日本映画研究における未踏の分野であること、石原裕次郎ら往年の日活アクションスターの出演作も多く、初学者にとって親しみのある主題だと思われることに加え、これらの作品群の公開年 (56 年) が 120 年間の日本映画史にとってのちょうど中間に位置するという構成上の配慮にも由来していた。本講座では、この太陽族映画に関して、具体的な作品を映像資料として適宜上映しながら、以下の 2 つの論点について解説した。(1) 太陽族映画の原作である石原の小説が元来、その「ハードボイルド小説」に影響を受けた文体から「映像的」と呼びうる形式を備えていた点、(2) 太陽族映画の映像表現が「フィルム・ノワール (film noir)」など同時代の外国映画との共通性が認められる点である。

以上のような構成で、120 年目を迎えた日本映画の隠された側面を、太陽族映画を事例に照射する試みを講座の全体を通じて行った。

<第 2 回 12 月 10 日>

ヨーロッパ映画と文学表現

—新しい時間認識の発見—

本学文学部現代文化表現学科

准教授 要 真理子

20 世紀を代表する英国の小説家ヴァージニア・ウルフ (1882-1941) は、その特殊な文体から「意識の流れ」と称される手法の作家に分類されてきた。本講座では、この「意識の流れ」の描出を日常生活における直線的な時間認識とは異なる新しい時間認識の現れと位置づけ、これをウルフの映画評、および小説『ダロウェイ夫人』(1925 年)に見出させることを確認した。さらには、この小説と

1997 年に映像化された小説の翻案との比較検討を試みた。

はじめに、映画と文学のちがいを確認してもらうために、それぞれの媒体の特性を強調しつつ同じ場面を言語表現と視覚表現で描写した事例をパワーポイント資料で提示した。

次に、ウルフの映画評「映画と真実」(1926 年)に見出させる彼女が映画に期待した新しいメディアの二つの可能性を解説した。一つは、映画のなかで描写された現在が日常生活の時間経験とは同期しないことに由来する、ウルフ自身の言葉では「奇妙な感覚」と呼ばれる特質を表現する可能性である。もう一つは、映画が独自の造形的工夫 (視覚的效果) によって登場人物の現実の身振りや言葉を超えた感情を表現する可能性である。二つの可能性は、ともに現在の時間的な流れを抽出し、この抽出によって観客もまた映画で描写される複数の現在の流れを一度に見渡せるような超経験的な視点へと宙吊りにされる。そして、こうした視点から眺められた誰のものでもない感情や思考こそ、ウルフの文体が敢えて実現しようとしたものだった。

「映画的」とも称されるウルフの表現は、皮肉にも、映画《ダロウェイ夫人》(1997 年)では特定の主体によって文学的な表現に再帰させられている部分も少なくないのだが——とはいえ、最終的には、映画的演出と小説の描写を対照させつつ、ウルフの言わんとする「奇妙な感覚」を伴う映画の特性を参加者に追体験していただくことを目指した。批評は比喩表現、映画は象徴表現が多く、困惑された方も少なくなかったと思う。最後まで辛抱強くお付き合い頂き、皆様に心より感謝申し上げます。

＜第3回 12月17日＞

アメリカ映画の表現

一見えるものから見えないものまで一

本学文学部現代文化表現学科教授 副島 善道

秋期教養コース第3回の担当副島は副題を“アメリカ映画の表現 一見えるものから見えないものまで一”として、映画から文化表現の様相を研究することの成果と意義について発表を行った。今回の3回連続講座は「現代文化の一つの表現として映画がある」という大枠を担当者3名で決定し、この枠組みから逸脱しないよう、また逆に逸脱を恐れて恐縮もしないようにと了解を取ってスタートした。さて、筆者の総論的な研究対象は観念論美学であり、その解釈に基づいた芸術学を各論としている。美学と芸術学とは相互に補完的である。今回の教養コースでは、この内の芸術学の視点を前面に、そして美学をその典拠とする構成で講義を行うこととした。

この視点で映画を概観すると、映画はその表現にさまざまな工夫を凝らしてきていることがまず取り上げられる。たとえば、文章（文学）は「行間の意味」を著し、音楽は楽器の音色以上の「情緒」を伝え、美術はモチーフに物体以上の「寓意」を与えた。このことの実証を、1)「情緒」の解説、2)「寓意」の解説そして3)映画における「行間の意味」を映画作品等に即して解説した。加えて確認したのは、見ること・聞くことに特化した映画がその表現として目指したのは何か？ということである。

「表現の可能性」という視点からみると、映画はその出自から、他のジャンルの表現を重層的に利用する。映画は美術・音楽・文学・演劇などなど感覚も質量も複合的である。その結果、映画は他のジャンルの表現より「現実の再現」にいつそう容易に近づき近づけば近づくほどに芸術性（創造性）を失うことになる。これは従来の芸術表現が目指した補完

表現を映画は必要としないという、映画本来の構造が持つ長所に由来する欠点である。ここに至って映画に独自の表現として、時間の進行のそれを解説することとなった。このことをまた映画作品に当たって解説した。

このように動く絵画としての映画では、変化が時間の進行を示すという簡単な時間表現のほかに、移動の方向が将来の出来事の性質を表現することがある。つまり他のジャンルの芸術がうまく為しえなかった「時間の進行」の暗示が映画には可能であって、この特別なこの才能によって映画は文化表現の一つの現代的な形式となる、と最終的に結論した。

語学コース

春期:平成 28 年 5 月 14 日～7 月 16 日 毎週土曜日

秋期:平成 28 年 10 月 1 日～12 月 10 日(11 月 5 日は除く) 毎週土曜日

英会話

〈講座責任講師〉

本学文学部コミュニケーション文化学科

教授 奥田 洋子

(春期)

平成 28 年度春学期の英会話コースは、「英会話中級 A」と「英会話中級 B」とを開講し、「英会話中級 A」を本学文学部人文学科助教のポール・ホーネス講師が”Developing Conversation Skills through Discussion”という講座名で、また、「英会話中級 B」を、本学兼任講師のケヴィン・スコット講師が”Famous Americans 3”という講座名で担当した。その結果、「英会話中級 A」は計 16 名、「英会話中級 B」は計 10 名が受講し、修了者は「英会話中級 A」が 16 名中 12 名、「英会話中級 B」が 10 名中 9 名であった。

今学期の英会話コースについて気になったことをひとつ述べたい。「英会話中級 A」の受講者へのアンケートの回収率が 100%であったのに対し、「英会話中級 B」は、9 割の受講者が無事修了したにもかかわらず、回答した受講者が 8 名中 1 名のみであった。ちなみに、このひとりの回答者の満足度は非常に高かったものの、「英会話中級 B」の受講者全員の満足度を測るには、残念ながらやはり不十分であった。よって次回からは、できることなら受講者全員に回答してもらえるよう工夫したいと思う。

上記のような理由で、今回はアンケートへの回収率が 100%であった「英会話中級 A」に絞って少し詳しく見てみたい。

初めて受講した者の割合は 3 分の 1 で、残りの受講者はルピーターであったことから、同コース、そして担当者へのルピーターの期待度が高かったことが推測される。講座を知ったきっかけとしては、本学からの講座案内

と東上線の車内広告が同数で、例年どおり電車の広告を見たのがきっかけで参加した受講者が多い。受講の動機は、テーマに興味があったからと答えた受講者が 3 分の 2 を越え、コースを設置する際にテーマを十分検討することの重要性が察せられた。教室までの所用時間は 30 分以下とそれ以上が半々で、1 時間半以上の受講者も 3 名おり、興味のある講座であるなら所要時間はさほど問わない傾向が見られた。

英会話コースに関しては、四年後に東京オリンピックを控えているせいか、英語力の向上だけを目指して本学の公開講座に参加する受講者が比較的多いように思われる。開講時期、開講時間帯(土曜日の午後)、開講回数や講義時間に関しては、多少の差はあるものの、ほぼ全員が適切と答えている。一方、難易度については、適切と答えた受講者が 12 名であったのに対して、易しかったが 1 名、難しかったが 2 名であった。前回までの英会話コースを踏まえて、今回コースの概要の書き方などを工夫してみたものの、まだ受講者の習熟度の差の問題を完全に解決するまでにはいたっていない。

(秋期)

春期語学コースに続き、10 月 1 日から 12 月 10 日まで毎週土曜日新座キャンパスで秋期語学コース「英会話」を全 10 回にわたり開講した。前半の「中級(Aコース)」は、本学兼任講師のジョン・オリファント講師が、”The Many Faces of British Culture”(「イギリス文化の諸相」)という授業名で、また、後半の「中級(Bコース)」は、同じく本学兼任講師で今回公開講座を初めて担当したギャリー・リン・ハシー講師が、”Let’s Chitchat”(「おしゃべりしようよ」)という授業名で、観光英語を担当した。

まず、A コースでは、本や映画からの抜粋を通してイギリスの歴史や王室制度、階級制度やイギリス発祥のスポーツなどについて学んだ後、受講者はグループやペアで意見交換した。アンケートによると、回答者は50代から60代の男女が半々で、全員がテーマに興味を引かれて参加している。ただ、今回はやや難易度が高かったようで、修了者は約半数に留まっている。回答者の要望にもあるように、前の週に次の授業の資料を予め配布して受講者に予習する機会を与えるなど、授業の進め方を少し工夫した方がよいように思われる。それによってディスカッションにより多くの時間を割くことができ、また、今回難易度が高いと感じた受講者も授業について行けるようになると思われる。

次に、後半のBコースでは、空港からレストランや土産物屋まで、海外旅行で使えるスキルの向上を目指した。受講者の年齢層は20代以下から70代まで幅広く、受講動機も、テーマに対する興味や近隣に住んでいるから、無料だから、毎回英会話コースを受講しているからなど多岐にわたった。興味や関心が深まったなど比較的満足度は高く、修了者も半分を超えたが、難易度に関しては回答者の三分之一が易しすぎたと答えている。また、開講時間については、午前中かAコースと同じ1時ごろからの開講を希望するものが目立つ。

全体的に見て、教養的なテーマよりも実用的なテーマの方が広い世代にアピールするようだが、その一方で、受講の動機がはっきりしているのは教養的なテーマの受講者の方である。どちらのコースの受講者も、自分たちが会話やディスカッションのような形で積極的に英語を「発信」できる時間を増やしてくれるよう求めている。難易度についての解決策としては、同じ中級でもひとつは「中級下位」(Lower Intermediate)、もう一つは「中級上位」(Upper Intermediate)と位置づけ、前者は実用的なテーマを取り上げて午前中に、

また後者は教養的なテーマを取り上げて1時からにするなど、可能な範囲内で受講者、特に毎回受講している継続者の希望に応えるようにして行けるとよいと思う。

中国語会話

〈講座責任講師〉

本学文学部コミュニケーション文化学科
教授 池上 貞子

(春期)

今年度春期の公開講座も、長年受講している中堅リピーターに加え、何期かぶりに再受講した人やまったく新しい受講生など多様な顔ぶれがそろい、和気藹々とした雰囲気の中で実施されていた。授業の内容は、前期講座の終わりに受講生から意見やリクエストを出してもらい、それらを中心に組み立てたということだった。具体的にいくつか例をあげると、ユニークな回文詩や早口言葉の練習を通じて、朗読および発音の難しさ・面白さを体験。また、講師が提示した中国語の謎々を解きつつ、受講生たちは日本語の謎々も出して、それぞれの特徴を比較し、語学の面白さを分かち合った、等々だ。

これらに加え、中国語の短いユーモア文や少し長めの笑い話の解説にも挑んだようである。さらに短編小説を読んで、読解力を高めながら、現在の中国社会事情の理解にも努めていた。その他、中華国料理のメニューの読み方や料理と文化の関連についても話し合い、中国へ行く機会の多い受講生たちが自分の体験談を披露していたということだ。最後には、受講者全員が自分の得意料理のレシピを中国語で表現することに挑戦したようである。

最終回には、全員が中国語検定のテスト問題に挑戦したとか。ちなみに、受講生の中にはすでに中検3級に合格した人が多数いる。こうした成果を上げるため、講師は一定の方針を定め、毎回、受講者が関心をもつようなテーマを取り上げて、授業を展開している。

いつの授業でも受講者が飽きることのないような内容を編成することは、授業の担当者としては、かなりの工夫が必要で、苦しみ半分、喜び半分というところであろう。実施母体としては、こうした努力に見合う、受講者のいっそうの増加を図る方策が求められていると思う。

(秋期)

今回もリピーターが多かったが、新しい受講者も迎えて和やかな雰囲気で行なわれた。内容については、春期講座の終わりのころに受講者のリクエストを求めたところ、中国の季節に関する話や少数民族の話が聞きたいという意見が多かった由。それらをヒントとして、これまでの学習を生かす工夫をしたようだ。

まず一年四季の、それぞれの季節に関連することわざや熟語を学んだ。さらにまた、深く知るためのモデルケースとして、普通の中国語教科書ではあまり触れられていない年中行事の「鬼節」（日本のお盆に相当）を取り上げ、具体的な習慣やその背景をなす考え方などを学んで、日本の風習などとも比較しながら中国語表現の練習をしたという。

一方、少数民族については、55いるとされる少数民族のうちでも特別の存在感のある「回族」のことを、より詳しく取り上げていた。回族はイスラム教徒なので、今日の世界的な関心事ともおおいに関連がある。また日本人にとっても身近な問題として考える必要が出ていたので、ある意味で時宜を得たテーマだったとも言える。受講者にとっても、長年中国語を習ってはいるものの、このような突っ込んだ学習の仕方をした人はあまりなく、新鮮かつ刺激的だったのだろうか、よい反響があったようである。

その他、毎回の授業の冒頭にホットニュースやこの一週間の気になる話題を話し合い、中国語での表現や注意点を習うということも試みていた。このようにいろいろ盛りだくさ

んな内容のため、講師は、たとえば季節の散文など、今回のトピックスについてさらに教材を準備していたのだが、次回にまわさざるを得なかったということだった。さらに、今回の希望調査では、中国の簡単な古文の内容を入れてほしいというのも出ているので、今後、それも計画に入るのではないかなと思う。いずれにせ、受講生仲間で中国旅行に出かけた時の中国語を、教材の一つにして、みんなで検討し合うこともするなど、まさに活きた中国語学習が行われているとも言える。

朝鮮・韓国語会話

〈講座責任講師〉

本学文学部コミュニケーション文化学科

講師 吉田 さち

(春期)

朝鮮・韓国語コースは昨年度開講し、今年度二年目を迎えた。初年度である昨年度は、春期・秋期ともに初学者向けの「朝鮮・韓国語入門」コースが開講された。今年度は、朝鮮・韓国語コースとしては初めてとなる中級者向けの「朝鮮・韓国語中級」コースが開かれることになった。ご担当頂いたのは、本学兼任講師の荻野千尋先生である。

講座名は「楽しく学ぶ韓国語会話」とした。対象は「ハングル文字や発音を習得し、より会話力をつけたい方」である。目的は、(1)「食事やショッピングなど身近で、実用的なテーマに沿った簡単な会話を学ぶこと」、(2)「韓国語の正しい「発音」と「イントネーション」、「リズム」に慣れること」の二点である。実用的な会話のみならず、韓国語の音声的特徴に慣れさせることにも焦点を当てたのが本講座の特徴だと言えよう。

授業の概要は、次の通りである。まず、テキストの各課のスキットに出てくる文法事項を簡単に学ぶ。次に発音やイントネーション、リズムに注意してスキットを読む練習を行う。余裕があれば、スキットの単語を自身の実際

の状況に置き換えてオリジナルの対話も行う。このような流れでテキストに沿って学習し、最終日にはしめくくりとして受講生がクラスメートの前でスピーチを行った。

荻野先生の授業には、受講生による実践的な活動が多く取り込まれている。例えば、会話の役割練習を暗記し、教室の前に出て動きをつけながら行ったり、会話を3回読む練習をするのに時間をはかり、徐々に早くなっていくことを確かめたりした。このような活動は受講生たちにとって若干の緊張感もあり、楽しんで行ってもらえたようだ。

講座修了後アンケートでは「まだ初級レベルの私にとっては少しレベルが高い内容だったが、発音に重点を置いた講座でたくさん練習できたので自信ができました。来期も同講師での講座がありましたらぜひ受講したいと思います。」という意見があげられており、実践的な内容に対する満足度の高さがうかがえた。

一方、昨年度から連続受講している方から、テキスト代が別途かかることは、講座の申し込みをする前にその都度説明が欲しかったといった意見があげられていた。責任講師である私の調査不足によって生じた課題であったが、荻野先生がご考慮下さり、次回の公開講座ではプリント配布の形をとっていただくことで改善される予定である。ご担当の荻野先生に厚くお礼申し上げる。

(秋期)

2016年度秋期公開講座は、春期に続き、「朝鮮・韓国語中級」コースが開講された。春期公開講座に引き続き、本学兼任講師の荻野千尋先生にご担当頂いた。受講生は8名で、そのうち5名は春期からの連続受講生であった。

講座名は「話してみよう韓国語」とした。講座の目的は、一日の日課や家族、休みの計画、約束、趣味など身近なテーマに沿った会話ができるようになることである。春期講座と同様に、韓国語の正しい「発音」と「イン

トネーション」、「リズムや強弱」に慣れることにも焦点が置かれている。

授業ではプリントを中心に日常会話で使える表現を学習した。プリントは、毎回3つほどの文法事項や語彙が学べるようになっていく。学んだ文法や語彙を使って簡単な文章を作り、短い会話を行い、最後に学んだ表現を使ったより長い会話に挑戦するという流れとなっている。なお、受講生のレベルが比較的高かったため、授業の進行も韓国語で進められたそうである。

会話練習ではペア・グループごとに自分たちの声を録音する取り組みを行ったとのことだ。自分の発音を客観的に聞いたり、何秒で言えるか時間を計ったりすることで、受講生たちは、反復練習の有効性を体感できたようである。

春期講座からの連続受講生が中心となり、終始和やかな雰囲気の中、講座が進められたようである。講座修了後アンケートでの「今後、また本学の公開講座を受講したいと思いますか。」という質問に対して回答者全員が「受講したい」と回答していることから満足度の高さが伺える。「講師の荻野先生のお話はいつもとても興味深いものでした。」との意見も寄せられていた。

課題であったテキスト代については今回プリントを配布していただいたので、「今回は、テキストの購入がなかったのが、とてもありがたかった。」との意見が出ていた。

「要望」として出されていたのは、開講回数を増やして欲しいということ、初級・中級の複数のコースを同時に開講してほしいということの2点である。そのためには受講生を安定して確保することも課題となってくるだろう。本学まで30分以内、時間がかかっても1時間以内の受講生が大半であるので、近隣にお住まいの方への広報も重要になってくるように思われる。

くずし字読解コース

春期:平成 28 年 5 月 14 日～7 月 16 日 毎週土曜日

秋期:平成 28 年 10 月 1 日～12 月 10 日(11 月 5 日は除く) 毎週土曜日

〈春期講座責任講師〉

本学文学部人文学科教授 泉 雅博

くずし字読解コース・入門

2016 年度春期の公開講座「くずし字読解コース・入門」は、江戸時代の古文書を初めて読む方を対象に、古文書解読の初歩的な手ほどきをしました。

江戸時代には民間でも膨大な量の文書が蓄積されました。それが現在では「古文書」と呼ばれ、各地に残されています。そのことを実感していただくため、今年度のテキストは、新座校舎の所在する埼玉県のほか、群馬県、愛媛県、石川県など、各地の古文書を集めてみました。

あくまでも入門講座ですので、初歩の解読トレーニングを主眼としました。テキストに選んだのも、典型的な御家流のくずし字で、よくある基礎的な内容の古文書ばかりです。とはいえ、独特の言葉や様式などから、できる範囲で時代状況を説明したり、複数の関連文書をあわせて読むなど、歴史解読の面白さをお伝えする工夫もしました。

しかし、終了後の受講者アンケートを拝見すると、「『江戸』の時代背景についてもっと詳しく話を聞きたい」というご感想や、「内容がもっと興味をひいて、読んで面白いようなもの(テキスト)はないでしょうか?」という厳しいご意見もいただいています。“初歩の手ほどき”という限定のなか、テキストの内容の「面白さ」をどこまで追求できるのか。困難ですが検討すべき課題をいただきました。

今年度の受講者は 10 名で、やや少なめでした。前年度まで本入門講座を受講されていた方が、衣替えした一般講座にリピーターとし

て「進学」したためと思われます。入門講座の担当講師としては、今後さらに一般講座へ「進学」者を送り出すとともに、新規の受講者をお迎えできるよう、引きつづき努力したいと思います。(関口博巨)

くずし字読解コース・一般

すでに退職した身ではあったが、春期公開講座で「くずし字読解コース〈一般〉」を担当させていただいた。〈一般〉は〈入門〉の次ということで、量・質とも単なる初歩よりはハードルを上げたが、初めての方も歓迎とした以上、「準備体操」を 3 回設定、下からひっくり返って読む文字、偏と旁などの訓練をし、その上で《内容が面白いから必死に頑張る》という状況を生み出すべく、主題を「幕末・維新一江戸～東京の激変を古文書から読みとる」に限定、調査で得た東京大学史料編纂所蔵文書から数点をテキストとし、事前に全員に振り宛て予習させ、自己の現状認識のための「現状把握」を毎回おこなった。

授業には酸素ボンベを引いて出席される方、現役時代私の古文書が楽しかったのという卒業生も 3 人(いずれも現正規社員・相互に関係なし)、現役の鉄道関係社員などを含め、定員近くの受講生ほぼ全員が、次回もこの授業があれば受けたいと言ってくれ、新座パスタ屋での「打ち上げ」を皆で楽しんだ。

(奈倉哲三)

〈秋期担当責任講師〉

本学文学部人文学科教授 岩田 秀行

4年目となった原典文字の読解コースであるが、本年度から、全体のコース名を「くずし字読解コース」とした。これで初めて、解読対象が古文書であっても古典籍であっても全体を統一的に表現できる名称となった。また、クラス名は、昨年より「入門」「一般」の2クラスとしている。春学期を歴史系の古文書を解読する講座とし、秋学期を文学系の板本および書簡類を解読する講座とした。

「入門」は「はじめてのくずし字 一江戸のコミックと膝栗毛」と題し、例年のとおり、明治期の教科書によって仮名の基礎を学んだ後、十返舎一九の黄表紙と滑稽本を扱い、変体仮名と基本的な漢字のくずしが読めるようになることを目的とした。「一般」は、「書簡文のくずし字 一男性書簡文の基礎と発展」と題し、書簡の定型文から始めて、書簡文範集に収められた書簡例文へと歩を進め、時代も明治から江戸へと遡り、基礎的な書簡文を読めるようになることを目的とした。

受講者は、「入門」8名、「一般」10名で、両クラスとも安定的に受講者が集まるようになった。修了証受領者は、「入門」7名、「一般」8名であった。「入門」は、書道を学んでいる方や職種上くずし字解読能力を必要とされる方等もあり、熱心でまた多様な受講者となった。「一般」は、初めての参加者も含め、昨年度の講座経験者の方々が中心となった。

「入門」は、基礎の丁寧な説明と豊富な配布物による本文の解説、さらには江戸時代の原典資料を実見する時間もあり、作品解読の楽しさと江戸文化の豊かな世界が伝わる内容で、毎年好評を持って迎えられている。「一般」においては、昨年度の女性書簡文に対し今年度は男性書簡文を扱う講座を組んだ。これまでは、一般コースなので出来るだけ多くの書簡文を読むことを目指していたが、受講者の

希望により本年度は進度を緩やかにし、板書によって文字の書き方を詳しく説明するよう心がけたが、この進め方の方が良いとの評価を受けた。

本年度の講座進行中、「和本リテラシー」提唱者の中野三敏九州大学名誉教授が文化勲章を受章したことは、くずし字を学ぶ意義を考える良い機会となった。この標語は本来「くずし字リテラシー」と呼ぶべきだと思うが、くずし字を学ぶことは、膨大に残る古文書や古典籍の内容を読み解き、過去の文化と対話を交わすことでもある。いまや、ネット上で多くの古文書や古典籍が公開されるようになった。いままで特殊な専門家しか見られなかった史料をだれもが簡単に見られる時代になったのである。くずし字解読能力を身につければ、この古文書や古典籍を自由に読み解き、過去の遺産を現代に活かすこともできる。誠楽しく有意義なことではなかろうか。

参加者の皆さんにとって、本コースがくずし字への入門と発展への手助けとなり、さらには古文書・古典籍の世界へ自由に羽ばたく能力を身につけられるよう、来年度以降もコースの継続と改善の努力をおこなってゆきたい。

パソコンコース

春期:平成 28 年 4 月 23 日～5 月 7 日 土曜日 <3 週連続講座> (新座キャンパス)

秋期:平成 28 年 11 月 12 日～11 月 26 日 土曜日 <3 週連続講座> (文京キャンパス)

<春期講座講師> (新座キャンパス)

ホームページ作成入門:

高齢者・障がい者にやさしいページを!

本学文学部人文学科准教授 福田 博同

「ホームページ作成」は根強い人気があり、また、時間数が足りない、とのご要望に応え、昨年度より 1 日追加し、3 日(9 時間)開催しました。当初受講者 38 名中 3 日修了者は 29 名。50 代 13%, 60 代 39%, 70 代以降 21%で、50 代以降が 73%と高齢の方が多いう講座です。

演習の 1 日目は準備編で「起動と終了|ショートカットキー|フォルダの作り方|日本語入力|CD-RW のコピーと保存|でした。2 日目は、1 日目の復習と、「単語登録|ホームページの仕組み|HTML5 の特徴|図や写真の HTML 化」。3 日目はそれらの復習と「スタイルシート、ブログ|音の制作|表の作り方」でした。視覚や聴覚など障害のある人も利用できるアクセシビリティ対応のホームページ作りです(教材頁 QR コード:文末図 1)。チェッカーは W3C の「The W3C Markup Validation Service」です(文末図 2)。最近ではアクセシビリティ対応でないホームページが多いので(例えば A 新聞社で 155 エラー)、見本の HTML5 文は 0 エラーのページを用意しました。必要部分を修正する方式と、YouTube 動画なども含めた教材を用意し、短期間で HTML5 の基本を学ぶ方式です。

アンケート結果は複数回提出された方もおられるので、母数は多い場合もあります。() 内に母数を記入しました。回数が「適切」51%(39 件中)、「少ない」49%と、内容の充実度故にまだまだ足りないようでした。

難易度は「易しい」13%(39)、「適切」44%、「難しい」44%でした。パソコンの習熟度を知

ることは教え方の工夫で重要です。「キーボード入力が苦手」18%(34)、「ショートカットキー」知らない、使っていない 60%(35)、「単語登録」知らない、使っていない 85%(33)、「Editor」使ったことがない 97%(32)、「Excel」使ったことない 32%(34)、「図を描いた」ことがない 74%(39)、「マイク入力した」ことがない 94%(34)、「音楽ソフト使った」ことがない 94%(34)と、ほとんど初挑戦の状態です。

事後アンケートは次の通りです。

区分「非常にわかりづらい」、「分かりづらい」、「まあ分かる」、「分かりやすい」、「非常に分かりやすい」。及第点は「まあ分かる」以上です。及第点を記します。

- | | |
|---------------------|-----------|
| ① パソコンの起動と終了演習 | 82%教材 84% |
| ② ショートカットキー 演習 | 88%教材 78% |
| ③ フォルダの作り方 演習 | 78%教材 70% |
| ④ 日本語入力 演習 | 98%教材 91% |
| ⑤ CD-RW コピー 演習 | 79%教材 77% |
| ⑥ 単語登録 演習 | 79%教材 73% |
| ⑦ Home Page の仕組み 説明 | 66%教材 62% |
| ⑧ HTML5 の特徴とタグ説明 | 48%教材 48% |
| ⑨ 図の描き方 演習 | 75%教材 76% |
| ⑩ 図、写真の HTML 化 演習 | 61%教材 71% |
| ⑪ 音の作り方 演習 | 78%教材 76% |
| ⑫ スタイルシート 説明 | 33%教材 36% |

⑧の HTML5 の特徴とタグ、⑫のスタイルシートはもともと理解するのが難しいが、この教え方や教材を工夫する必要がありました。主なご意見を以下に記します。

- ①先生が親しみやすい教え方をして下さい、ありがとうございました。
- ②無料で教えて頂き有難いです。
- ③皆さん親切にフォロー下さったと思います。
- ④習熟度別にしていただきたい。

- ⑤絵コンテ等の準備の仕方等も教えていただければと思います。
- ⑥(CSS は)あらかじめ背景色をページごとに覚えておくなどした方が初心者にはわかりやすい。
- ⑦BGM の作り方等を楽しみにしていたのですが短くて残念でした。
- ⑧高齢の方が多く、進度がゆっくりでしたので、日数がもっとあっても良かったのでは。
- ⑨もっと深く学びたいと思いました。
- 最後に、独楽鼠のようにアシストされた TA さんに感謝しつつ、さらなる分かりやすい教材を作り、わかりやすい説明を目指します。

図 1 教材



図 2 checker



〈秋期講座講師〉(文京キャンパス)

Excel 入門

本学文学部現代文化表現学科

准教授 伊藤 穰

公開講座秋期パソコンコースは、11 月 12 日、19 日、26 日の 3 日間、昨年に引き続き文京キャンパスにて開催されました。いずれも土曜日です。従来どおり、時間は 1 日 2 コマ (90 分)、計 6 コマです。講座のタイトルは「Excel 入門」ですが、内容としては基礎から中級程度の内容に踏み込んでいます。昨年までと異なり、日程が 2 日間から 1 日増えたことにより、扱える項目も増やすことができただけでなく、復習にもしっかりと時間を取ることができたと思います。具体的には、例年通りに、これから Excel を始める方を中心

的な対象として、基本操作や、機能について初歩から説明し、最終的に簡単な家計簿などを作成できる段階に到達できるようになること、そして、業務で使う可能性のある、やや難易度の高い関数を使いこなせるようになることを目指しました。

初日は、Excel の基本操作として、セルへの入力や、Excel 特有の書式の設定、罫線や網掛け、そして、やや操作が難しいページ設定などのほか、ワークシートの設定などを行いました。2 日目は、初日の復習を踏まえたうえで、数式や関数の使い方について解説しました。そして家計簿を作成することを前提に、練習問題をとおして知識の定着を図りました。具体的には、四則演算のほか、関数として SUM、AVERAGE、COUNT、MAX、MINなどを扱いました。そして 3 日目は、発展として、論理関数の IF や SUMIF、VLOOKUP など、やや難易度の高い関数について解説し、練習問題に取り組みました。

受講生の皆様は、例年どおりに熱心に取り組まれていました。経験者の方も多くおられたようで、練習問題などもとくに苦勞することもなく解答されている様子でした。その一方で、初学者の方にとっては、とくに 3 日目の内容は難しかったようです。様々な受講生の方がおられますので、ご要望も様々ですが、幅広くお応えできるように今後も務めてまいりたいと思います。

また、こちらも例年のことですが、優秀なティーチング・アシスタントに恵まれたことによって、なんとか無事に終えることができたと感じています。逆に言えば、彼らの力無くして講座の質を高めることは難しいと思われます。

最後に、講座を受講してくださった皆様に深く感謝申し上げます。

受講生からのレポート

「視点」による絵画史の楽しみ方

春期教養コース（新座）受講生

浜田 博久さん

19世紀日本の時代転換：「近世」から「近代」へというテーマで日本絵画史の変遷を『素朴』というキーワードで検証された講義を受講して、これまでに何気なく見たことのあった作品の奥に秘められた何かを見ることができたような気がします。

日本と西洋の作品をリアルと非リアル(素朴)という表現方法で、その時代にあてはめながら変遷をみていると、江戸時代には素朴な作品がたくさんあった。鎖国から開国した日本に西洋文化が入ることでリアルな表現の作品に流れが変わる。その後、明治時代を経て大正時代になると素朴な作品へと回帰していく。

日本の絵画の本質は、その『素朴さ』があってこそ日本美術の特色を表現していけるものと思われる。リアルさを追うよりもリアルでなくても素朴さの中にある味わいで人々に訴えかけているように思えます。ここにも日本独特の『おもてなし』がこめられているのではないかと感じられます。

現在においてはパソコンを利用したグラフィックな絵画や仮想現実的なものなどがあふれていますが、私はどんな時代になっても日本人の心に訴えかけられることができるのはこの伝統的な『素朴さ』ではないかなと思います。

今回の講義で作品をひとつの視点で時代の流れとともに検証していくと、過去にも素朴画が復活したように、この先『VR（仮想現実）』から『非リアル（素朴）』へ歴史はまた繰り返されると思います。

普段あまり馴染みのない絵画史も視点を変えることによって興味深いものにかわり楽しい

講義でした。

平成28年5月28日土曜日 民俗の発見を

受講した reaction のレポート

春期教養コース（新座）受講生

坂出 準さん

1. 鶴教授のレジメ（講義録）2 近世から近代へ

* 不思議な現象への関心

「平田篤胤 不思議な話に大きな関心、記録、考察。不子浸透を唱え、幕末の政治思想に大きな影響。その基礎には、霊魂観に関する実証的な検証作業。

『勝五郎再生紀聞』武蔵国中野村百姓源蔵の倅勝五郎が自分の前世を語った話。8歳ころから姉、両親に対し、自分の前世は小宮領程窪村百姓久兵衛の子ども藤蔵で、6歳の時に病死、その後勝五郎に生まれ変わったと告げる。程窪村に確認するとそのとおりであった。篤胤は勝五郎に会って話を聞き、記録。民俗学の先駆的研究。」（P5）

に関連し、述べる。

東京都の日野市役所では、この生まれ変わりの話を、町おこし「ほどくぼ小僧」として宣伝している。

東京の新宿から京王電車特急乗ること30分くらいで高幡不動駅に着く。

真言宗の高幡不動尊に、現在、勝五郎の墓はあり、「ほどくぼ小僧」として資料がある。

高幡不動駅は、上北台から多摩センターへ行く多摩モノレールと接続し、多摩センター方面の次の駅が程久保駅である。この「程久保」が上記「程窪村」に当たる。さらに、多摩モノレールの次の駅は、多摩動物公園駅である。この両駅の間「程久保駅」寄り位に、勝五郎の前世の藤蔵の生家がある。現在でも

その子孫が住んでいる。モノレールと平行する旧道で、その家の旧道隔てたところのわきに6体だったかお地蔵さんがある。さらにトンネルを過ぎ、次の駅が、中央大学・明星大学駅で、その次が、大塚・帝京大学駅である。両駅の間あたりが、八王子市東中野である。武蔵国中野村とはこの辺である。

要するに、生まれ変わりの地は、多摩丘陵の山を一つ挟んで近い、直線距離2キロメートルほど。中央大学の敷地には、勝五郎が藤蔵の生家にまで歩いた道が保存されている。

私は、高幡不動尊のちょうど裏の多摩丘陵の斜面の戸建て住宅団地に50年ほど住んでいた。30年ほど前であろうか、隣で生まれた女の子が勤め人になって、最終電車で高幡不動駅に着き、帰宅しようと、いつもの道、高幡不動尊の角を曲がろうとすると、ふさがって塀になっていて、ずーと、塀。次の駅、南平駅付近まで歩かされ、やっと、暗い裏道をぬけて、命からがら自宅にたどり着いたという不思議を語ってくれた。

2. 鶴教授のレジメ（講義録）5 柳田国男（1875-1962）の登場（P6～10）

さて、柳田国男のエピソードを一つ紹介しよう。

私は、成城の柳田国男の家の隣の家で生まれ、3歳だったか引っ越した。私の両親が新婚で親戚の成城坂出邸に間借りしていたのであった。私は、終戦後のベビーブーマーであった。

成城学園という学園街は、新宿牛込の成城中学高校が、世田谷の砧に学校を建て、小田急電鉄を引っ張ってきて、駅を造り、学園の土地を父兄である私の祖父、坂出鳴海が頼まれて、土地区画整理のデザインをして学校が生徒の父兄に買ってもらったのが始まりである。

小田急電鉄は利光一族創業者が、皇居から、この新宿を通り、成城学園へ富士山めがけて一直線に線路を引っ張った。今は成城の駅は地下に潜ったが、喜多見側に小田急電車の上を富士見橋が架かっている、よく富士山が鉄路の先に見えたものだった。

祖父が駅と学校との道の交差する角の一等地、現在のカリス成城の宅地、を取得。隣が、柳田邸で、長男柳田為正氏が私の伯父坂出秋彦の出身の成城中学高校だったので、隣人となったものである。

私が赤ん坊のころは、平塚らいてふさん、柳田国男氏のお孫さんたちとともに、おぶうをつかった。柳田さん、ち、の、道を隔てた前が、丹下健三さん、ち、であって、ヤギを飼っていた。私は覚えていないが、母によると、柳田国男氏の見ている、そのやぎの鼻の孔に指を突っ込んで、めええ・・・、とヤギが鳴いた。それを見ていて、わおはっはっは、と笑ったという。私は、口を横に広げて、柳田国男氏に、いー、という顔をした。

柳田為正氏の奥様は富美子様で、お子様が、男の子が3人、一番下が、一緒におぶうをつかった、年が近い、四助と呼び捨てに呼んでいた男の子である。女の子は、八重子様といったように思う。引っ越してから、成城の坂出秋彦邸にはよく遊びに来て、その子ども、國彦、正彦のところに、柳田邸と坂出邸との境の柴戸から、四助たちが遊びに来て一緒に、三角ベースの野球ごっこなどをした。柳田邸は、坂出邸から見える、赤茶けた木造3階建てが、為正氏一家、続く、隣の、白地に茶色の木地の洒落た家が柳田国男氏の住まいであった。現在は、もうこの成城柳田邸も丹下邸もなくなっている。成城坂出邸は、現在、私の従兄弟の坂出豊海一家がカリス成城という、お洒落なハーブ屋さんのお店になっている。

教育と EDUCATION

春期語学コース中国語会話受講生

近藤 安則さん

すべての日本人にとって教育とは義務教育から始まる。文字どおり教育を受けることが義務…従って、教育を受ける能力や教育を受ける理由の有無、向上心の大小…などに関係なくすべての日本国民が受けなければいけない。

全ての国民を政府の意向の教育水準まで育ててくれとの、教えなきゃいけない義務教育で有るが為に、全ての国民レベルまで引き下げられた教育すら理解してくれない義務だけで椅子に座る者達のあおりを受ける現実が義務教育にある。新聞が読まれ、選挙が自筆でできるという奇跡のような国が出来上がった反面、余りの学習レベルの低さに、教育を甘く見て世間をなめ人生を幼少時に壊してしまう数多くの被害者もでる。

教える側が、努力の限りを手取り足取り尽くす義務教育は、教わる側の学習的自立が育ちにくい。

外つ国（とつくに）では勿論義務での教育などない。EDUCATION とは富裕層にだけ許される特権であり、貧しさから抜け出す唯一の手段と信じて、家族の生活の犠牲の果てに希望を託された子達の戦いの場である。

EDUCATION の殆どの国の最初の教育は、指導する教育を多分受けていないだろう指導者が、蜂の巣をつついたような騒ぎの中で教鞭をとり授業が進む。この手の教育現場ではすべての生徒を指導することなど初めから無理で、多くの生徒たちの中から、指導者にとって特別な注意&関心をもたれる存在になることが教育を受ける側にとって絶対の条件になる。勿論、多くの生徒は切り捨てられ見放されていく。義務教育のように教えねばならない義務など指導者は最初から負ってなどいない。

知らないことを知らないと言える甘さが義務教育にはあり、端的に説明すると EDUCATION には、知らないことを分かる範囲と分からない範囲の説明をすることに依って自分の努力の量を指導する側の人の記憶に残すくしつこさ>が必要になってくる。

Education に学んだ者の目には義務教育に培われた我々日本人の学ぶ甘さ&ひ弱さは軽蔑の対象以外の何物でもないだろう。

日本人が外国語を習得しようところざし多くの者が挫折する理由の一つが其処にある。外国語を日本人に指導するネイティブ先生達は EDUCATION で学び、学ぶ戦いを切り抜けてきた勝利者である事を肝にめいじて、義務教育で培った甘さを捨てる覚悟をしなければならない。

はじめて読む古文書講座を受講して

春期くずし字読解コース（入門）受講生

田中 美恵さん

以前、歴史資料館にて目にした「乍恐以書付奉願上候」との謙った書付けに心ひかれ、どんな人がどんな思いでそれを書いたのか知りたくなり文章が読めたなら…との思いで受講しました。

講義は本物の古文書に触れ、紙の種類・折り方で江戸時代を感じる事から始まり、古文書の形式、古記録との違いなど知りました。

テキストは江戸時代の離縁状、各地の古文書。離縁状はまさに三くだり半で、三行半の文章で簡潔。解説していただき当時の世相をかいま見た気がしました。起請文・火札・爪印・縁辺の言葉や意味を初めて知り感動。各地の古文書では自分の郷里に近い所のものもあり興味深く、水主・直乗・上乘・船足・御極印などの言葉を知り少し具体的なイメージの風景を想像しました。夫食・自普請・才許・注進・久離などの言葉を知った事では、江戸時代の身分制度や寺請制度、環境の厳しさを

改めて思いました。

可仕候・御座候得供・仍如件・可被下候などの言い回しや、如何様・罷越・実正・難有などの言葉も少し見慣れてきて、ちょっとだけ音楽のリズムのように流れを感じられる時がありました。(地名・名前・年号は今後に。)

(いまだに笑ってしまう言葉は六ヶ敷です。)

私は歴史に興味があって古文書を始めた訳ではなく、書き手がどんな人だったのか、が興味の対象でした。しかし古文書を読み解く事が出来たならば、その人の生きた時代の制度・文化・生活ぶりが見えてきて歴史にも目がゆくのだなあ、と思いました。

まだまだ見慣れぬ字との闘いです。講座にて理解したつもり、で忘れていたり。古文書の意味を理解するには時間が必要なのでしょうが、少しずつ新たに知ること、学ぶことの出来る講座でとても楽しかったです。

武蔵野の今と昔

秋期教養コース(新座)受講生

瀧上 浩司さん

2011年に豊島区立郷土資料館で「野っ原にぼつりと建つ昭和30年代の都電大塚車庫」を見て、現在の街並みが当たり前になっている私を実感しましたが、今回のテーマも同様に興味が湧きました。

第1回は松平信綱が江戸と川越の中間にある野火止の原野を開拓し、平林寺の境内林には国木田独歩の「武蔵野」の面影があり、田山花袋が「武蔵野の昔の匂いを嗅ごうとするには野火止の平林寺附近が好いね」と言った詩情があるとのことですが、ただ紅葉が美しいではなく総門から山門、仏殿、本堂と一直線に禅宗様式の伽藍が並ぶ質素な造りで広い雑木林を残し、文学によって修飾されている景観であることを考えさせられました。

第2回は江戸時代大量の荷を一度に運べる舟が川越と江戸を結んだが、1895年に川越、

国分寺間に列車が走り、1896年に川越、大宮間に乗合馬車が走り、1914年に開通した東

上線は舟運に決定的な打撃を与えたとのことですが、現在新宿、池袋へ直接アクセスが当たり前になっても中央線に接続したり高崎線に接続したりと苦労を重ねて今の姿があることを知りました。

第3回は日本の狭いレーンは危険だが、オランダやカナダのように自転車道を作れば良いとのことですが、バイクに怯えて車道走することに違和感があり、元々歩道で自転車レーンを設けるケースが多い現実を思い浮かべました。

第4回は人口増により周囲からの苦情が出て、地価上昇の中で売却・宅地化が進んで農地が失われてきたとのことですが、農業体験を通して消費者が食の安全を考え生産者との関係を改善するという発想は面白いと感じました。

第5回は川越や佐原のまちづくりを参考に外観を残しつつ建物内部をカフェ・レストランとして使うとのことですが、最近「旧川越織物市場、明治の姿に修復」のような動きも出てきて、誰が担い手になるかで違うと思いました。

以上、昔の人が如何に知恵を絞ったかを念頭に置きつつ現在の状況を踏まえて判断するということを教えて頂きました。

映画への愛情講座。

秋期教養コース(文京)受講生

鈴木 功一さん

今回、初めて跡見学園の公開講座に参加させていただいた。大学の公開講座というと、敷居が高かったのだが、「映画から考える文化表現—現代文化表現学として—」と題したもので、映画好きとして興味をそそられたからだ。また、本来、娯楽であると思っていた映画が大学での研究対象となっていることへ

の不思議さもあった。一体どんな講座なのだろう。結論をいえばとても良かった。映画鑑賞のうえで新しい視点を学ぶことができた。

まず一回目は渡辺大輔助教の日本映画であった。メインに取り上げたのが、太陽族映画であるのに驚いた。常識的に小津や黒沢の映画を論じるのだろうと予想していたのを、いきなり裏切られた感がある。単なる娯楽作と思っていた太陽族映画が、実はフィルムノワールの影響を受け、そのライティングの見事さは実は芸術性が高いという論は目から鱗だった。次に二回目の要真理子准教授のヨーロッパ映画。バージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』を取り上げ、一本をじっくりと論じて聞き応えがあった。圧巻は、第三回の副島善道教授の講義であろう。映画表現を行間の意味、カメラの視点、カットのつなぎ方、そして、構図。大きく4つの表現方法から論じるのであるが、文学や絵画、演劇と他の芸術との比較検討しての講義は、たいへん分かりやすく、また、造詣が深く、感心させられた。特に『アルノルフィーニ夫妻像』を見ながら画家が一枚の絵に込めた寓意性を微に入り細に入り説明され、映画も同様に監督の思いが各場面に込められていることを教えてもらった。教授の鋭い観察眼があればこそだが、映画以外の芸術一般への教養の豊かさが映画鑑賞の上では不可欠であることを深く学んだ。

三人の講師がそれぞれの映画への溢れる愛情を語り、映画を観ることの楽しさを再認識させてくれた。その意味でも素晴らしい講座であった。

映画から考える文化表現

秋期教養コース（文京）受講生 瀧上 浩司さん

私はテレビ世代なので『風と共に去りぬ』、『ローマの休日』といったアメリカ映画をよく見てきたのですが、考えてみればかつてサ

イレント映画の時代に「ドイツ表現主義」が世界規模に広まり、その代表格が『カリガリ博士』でした。そこではゆっくりと目を見開くチェザーレをアップで捉える、彼が殺人を犯す場面では影だけで様子を映し出すというようにデフォルメによって人間の不安を表現しようとしたのです。

そして第3回「アメリカ映画の表現」ではチャップリンの『キッド』で子供を置き去りにして、逃げ去る時は左方向・取り返そうと戻る時は右方向に歩く母親のように良くないことは左方向・良いことは右方向と語られましたが、左と右にしか動けない時代様式を感じました。また、『モダンタイムス』のラストでは朝の太陽を背に受けて画面手前に向かって歩き出し、続いて太陽に向かって歩いていく二人の後ろ姿となるのですが、朝陽（＝希望）に向かう二人を表象するため不自然を承知でか、朝から夕方と続く二人の道行きの果てしなさを暗示するのか、ミスにしたいと思えました。

さらに第2回「ヨーロッパ映画と文学表現」ではイギリスの小説『ダロウェイ夫人』から映画『めぐりあう時間たち』が作られたと語られましたが、小説では文章を追いつつながら一体どこで主体が入れ変わったのか、また誰が主体であるのかを把握するのに苦労する「意識の流れ」の手法が見られる一方で、映画では3つの時代に生きる3人の女性の物語で、ある時代の登場人物にこれから先に起こる事柄を他の時代の登場人物が予告する等わかりやすく観ることができるのです。これは第1回「120年目の日本映画」でも太陽族映画において内面的な描写が排されて、人物の行動の軌跡のみを叙述すると語られていて、小説の改作でありながらどちらが面白いかを考えさせる訳です。

以上、文字にはできない、映像にはできない表現の違いを学ぶことができました。

「ヨーロッパ映画と文学表現

―新しい時間認識の発見―

「アメリカ映画の表現

―見えるものから見えないものまで―

を受講して

秋期教養コース（文京）受講生

岡本 和明さん

今回受講した講座は、文化表現としての映画を通じ、われわれ受け手の時間認識の意味またその芸術的価値に関して、再考のきっかけを与えてくれた。かつてTVCM制作で30秒に全てを凝縮することに悩み続けた頃を思い出しながら、膝を打つこともしばしば、楽しく受講しました。

小説から映画への移行過程で、表現媒体の物理的制約克服に焦点を当てた分析は、受け手の想像力喚起がその社会性・芸術性に不可欠である事を示唆し、映画の発展を見ていくのに有意義であった。映画は、映像に音声を加え圧倒的な情報量で、意図的に時間の流れをコントロールし、語り手の解釈の帰結点へ受け手を誘おうとする。映像表現技術の進化は、時間等の物理的制約を超越し、受け手の思考に深く入り込む無限の可能性を暗示する。

映画の登場で、視覚と思考の関係性が大きく転換し、日常生活でのリアリティが、それを経験した時間とは別次元からの解釈で追想し、新たなリアリティを意識するという事実を、再認識することができた。ニュース映像に接して感じるリアリティは、その出来事発生から映像の視聴まで時間を経ており、目撃者として現場で知覚したそれとは、改めて言うまでもなく意味に大きな差異がある。

こうした基本認識を前提に、名作における映画独特の表現の工夫・技巧に注目すると、作り手の意図・企みを推察する楽しみが、映画の芸術的側面を感じさせることに繋がる事が理解できた。演出者の才能の発露として、カット割り、照明・カメラワーク、編集技法、

比喩表現、音楽や効果音の技法など、注目点は無数にある。殊に、巧みに操られた時間の進行、その解釈に意味を見出す醍醐味は映画ならではのと言える。

昨今のデジタル技術の進化で映画は、映像や音声の多様な表現に留まらず、リアリティ追及として劇場での過剰な演出もエスカレートしてきている。こうした潮流が、受け手の解釈を紡ぎ出す過程や自由に想像する余地を制限せず、映画の芸術的価値を減ずること無き様にと祈念する。

■資料

申込方法
受付期間

申込方法

往復はがき、FAX、Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。

- ①「ファッション文化とライフスタイル」受講希望
②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号
⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業
⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？

受付期間

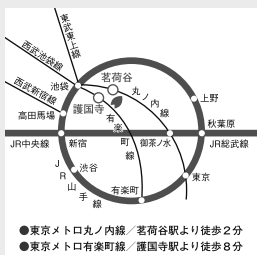
4月4日(月)より受付(定員になり次第締切)

※受講申込み受付後、書害にて受講証を郵送いたします。

※お申し込み頂いた方々の個人情報は、跡見学園女子大学文京キャンパス事務局公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません(法令などにより開示を求められた場合を除く)。

※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、大学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載します。

文京キャンパスへのご案内



<申込・照会先>



跡見学園女子大学
文京キャンパス事務局 公開講座係
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
TEL.03-3941-7420
FAX.03-3941-8333
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
http:// www.atomi.ac.jp/univ/

申込方法
受付期間

教養コース

往復はがき、FAX、Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
①「映画から考える文化表現」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所
④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？
⑨次回以降の本学公開講座のご案内を希望しますか？

受付期間 8月26日(金)より受付(定員になり次第締切)

パソコンコース

往復はがき下記の記事をご記入の上お申し込みください。
①「Excel入門(文京)」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所
④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？
⑨次回以降の本学公開講座のご案内を希望しますか？

受付期間 10月3日(月)～11月2日(水) 必着

※教養コースは、受講申込み受付後、書害にて受講証を郵送いたします。

※お申し込み頂いた方々の個人情報は、跡見学園女子大学文京キャンパス事務局公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません(法令などにより開示を求められた場合を除く)。

※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、大学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載します。

文京キャンパスへのご案内

※駐車場がないため、自家用車のご案内はございません。



<申込・照会先>



跡見学園女子大学
文京キャンパス事務局 公開講座係
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
TEL.03-3941-7420
FAX.03-3941-8333
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
http:// www.atomi.ac.jp/univ/

平成28年
6/4-18

毎週土曜日
(全3回)

受講料：無料

教養コース(文京キャンパス)
ファッション文化とライフスタイル

平成28年度 春期

跡見学園女子大学の
公開講座のご案内

時間 13:00～14:30 場所 文京キャンパス
対象 15歳以上(中学生を除く)の男女 定員 100名(定員になり次第締切)

6/4

ファッション誌で時代を読み解く

日本における、雑誌の歴史と
女性ファッションの流れ

講師：スタイリスト&ファッションディレクター 原由美子

画期的なファッション雑誌として1970年に創刊した「アラン」は、日本のファッションの流れに大きな変化をもたらした。20世紀の後半から現在に至る既製の衣は年代毎に変化し、それと相まって新しいスタイルのファッション誌が次々と創刊していった。40余年に及ぶ日本における既製服と雑誌の関係を紐解いていく。

6/11

電子マガジンの普及は進むのか

ファッション情報伝達における
インターネットと雑誌の役割

講師：本学文学部現代文化表現学科教授 富川 淳子

電子書籍元年と謳われた2010年から5年。電子雑誌の普及も書籍と足並みを揃えて進む予定だったが、電子化されたファッション誌の読者は広がる気配を見せない。はたしてファッション文化の伝達において電子マガジンに未来はあるのか?流行情報を例に挙げ、紙のファッション誌ならではの特性や役割を再確認しながら考察する。

6/18

貢献を実感できる場所や機会をご紹介します

ファッションブランドの
社会貢献・文化貢献

講師：本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科准教授 横井 由利

現代の企業は、利益の追求と並行して「社会的責任」を果たすことが、ビジネス的な成功とみなされる時代になってきた。この発想はファッションのブランドにも浸透し、利益の一部は環境保全や開発途上国の人道支援、文化の発展に寄与する芸術家への支援に費やされるようになった。こうした貢献活動が体験できる場所と機会を紹介する。

後援：文京区・公益財団法人文京アカデミー

平成28年度 秋期

跡見学園女子大学の
公開講座のご案内

教養コース(文京キャンパス) **映画から考える文化表現**
— 現代文化表現学として —

時間 13:00～14:30 場所 文京キャンパス
対象 15歳以上(中学生を除く)の男女 定員 100名(定員になり次第締切)

※全3回、全てに出席された受講者に公開講座修了証を発行いたします。

※今学期(平成29年3月末日まで)内に限り本図書館を利用することができます(閲覧のみ)。

120年目の日本映画 — 過去と現在をつなぐもの —

講師：本学文学部現代文化表現学科助教 渡邊 大輔

明治中頃の1896年と97年、キネスコープとシネマトグラフという革新的な映画装置が日本に相次いで渡来してから、2016年で120年。今日まで日本映画は、どのようにユニークな発達を遂げていったのか。いくつかの時期に焦点を絞り、最新の研究動向も紹介しながら、日本映画史・映像文化史の新たな見取り図を提示してみたい。

ヨーロッパ映画と文学表現 — 新しい時間認識の発見 —

講師：本学文学部現代文化表現学科准教授 要 真理子

動く映像を見たという人々の欲望は、19世紀のヨーロッパに映画という新しいメディアをもたらした。そして、この発明によって、一部の鋭敏な人々が自分のヴィジョンを意識し始めることになるのです。英国の小説家ヴァージニア・ Woolfもまたこうした鋭敏な感性の持ち主でした。映画作品「タロウ夫人」は彼女の小説の翻案であり、「奇妙な時間感覚」へと私たちを誘います。

アメリカ映画の表現 — 見えるものから見えないものまで —

講師：本学文学部現代文化表現学科助教 副島 善道

見て楽しい映画にはさまざまな工夫が凝らされています。それは目に見えるのですから、見れば何かが分かるのは当然。でもよく見てみると、見えないことまで表現されているのも映画です。私たちになじみのアメリカ映画はその初期の頃からこうした工夫を重ねてきました。ここでそのいくつかを観察し、映画表現の幅の広さと奥の深さを探ってみます。

パソコンコース(文京キャンパス) **Excel 入門**

時間 13:00～16:10 場所 文京キャンパス
対象 15歳以上(中学生を除く)の男女 定員 38名

※全3回、全てに出席された受講者に公開講座修了証を発行いたします。

※今学期(平成29年3月末日まで)内に限り本図書館を利用することができます(閲覧のみ)。

講師：本学文学部現代文化表現学科准教授 伊藤 穂

「インターネットやWordは使えるけれどExcelはあまり使ったことがない」という方を対象に、簡単な会計表の作成などの基本的な操作から関数の利用まで、練習問題を通して丁寧に解説します。

※「Excel」は米国 Microsoft Corporation の米国及び、その他の国における登録商標です。

後援：文京区・公益財団法人文京アカデミー

平成28年
12/3-12/17

毎週土曜日
(全3回)

受講料：無料

12/3

12/10

12/17

平成28年
11/12-11/26

毎週土曜日
(3週連続講座)

受講料：無料

申込方法
受付期間

教養コース

往復はがき、FAX、Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
①「19世紀日本の時代転換：「近世」から「近代」へ」受講希望 ②氏名（フリガナ） ③郵便番号・住所
④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？

受付期間 4月4日（月）より受付（定員になり次第締切）

パソコンコース・語学コース（英会話／中国語会話／朝鮮・韓国語会話）・くずし字読解コース

往復はがきに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
①希望講座名（例：英会話中級A） ②氏名（フリガナ） ③郵便番号・住所
④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？

受付期間 パソコンコース 4月4日（月）～4月13日（水）必着
語学コース（英会話／中国語会話
朝鮮・韓国語会話） 4月4日（月）～4月27日（水）必着
くずし字読解コース

※教養コースは、受講申込み受付後、要書にて受講証を郵送いたします。
※パソコンコース、語学コース及びくずし字読解コースは、応募者多数の場合は抽選となります。
※お申し込み頂いた方々の個人情報、跡見学園女子大学学務部教務課公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません（法令などにより開示を求められた場合を除く）。
※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、大学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載します。

新座キャンパスへのご案内

※地球温暖化防止のため、自家用車での来校はご遠慮ください。

●東武東上線（地下鉄有楽町線・副都心線）
「志木駅」下車 南口より西武バス約15分
「跡見学園女子大学」下車

●JR武蔵野線
「新座駅」下車 北口よりバス約7分

●西武線
「所沢駅」下車 東口より西武バス約25分「跡見学園女子大学」下車

●東武東上線（地下鉄有楽町線・副都心線）
「志木駅」下車 南口より西武バス約15分
「跡見学園女子大学」下車

●JR武蔵野線
「新座駅」下車 北口よりバス約7分

＜申込・照会先＞

ATOMI
UNIVERSITY

跡見学園女子大学
学務部教務課 公開講座係
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL. 048-478-3340
FAX. 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
http:// www.atomi.ac.jp/univ/

跡見学園女子大学の春期公開講座

日本の近世から近代をさまざまな観点で学ぶ。 語学やパソコン、ホームページ作成講座も。

教養コース

平成28年5月14日～5月28日 毎週土曜日＜全3回＞
時 間 13:00～14:30 場 所 新座キャンパス 対 象 15歳以上（中学生を除く）の男女
定 員 100名 受講料 無料

19世紀日本の時代転換：「近世」から「近代」へ

5/14[⊕]

維新の発端：安政5年政変を「悲劇」として読み解く
講師：本学文学部人文学科助教 三谷 博
日本の「近世」から「近代」への転換をもたらした明治維新について、その発端となった安政5年の政変（1858年）を「悲劇」の一種として読み解く。一橋党の大名と井伊大老がいかにして不倶戴天の関柄に陥ったか、また当事者双方の苦難や死をもたらした悪循環がどんな意味で新たな時代を生み出す糸口に転じたかを考える。

5/21[⊕]

素朴という視点から見た絵画史の時代転換
講師：本学文学部人文学科助教 矢島 新
明治維新は絵画史にとっても大きな転換でした。その内容は様々ですが、素朴というキーワードを設けることにより、見てくることがあります。豊富な作品例を提示して、素朴が大幅の花を咲かせた江戸時代、素朴がいったん姿を消した明治時代、素朴が復活を遂げた大正時代へと、日本絵画史の変遷を検証します。

5/28[⊕]

民俗の発見
講師：本学観光コミュニティ学部コミュニケーションデザイン学科教授 雷 理恵子
民俗学は日本に限らず、近世から近代へと社会が大きく転換する中で誕生した学問である。「あたりまえ」は見えないが、あたりまえだったものがそうでなくなる時、従来の生活文化が「民俗」として「発見」されるからである。講座では日本の民俗学が、近世から近代への時代の転換をどのように捉えたのかを紹介する。

教養コース受講者特典 ●全3回、全てに出席された受講者には、公開講座修了証を発行いたします。
●今学期（平成28年9月末日まで）内に限り本学図書館を利用することができます（閲覧のみ）。

パソコンコース

平成28年4月23日～5月7日 毎週土曜日＜全3回＞
時 間 13:00～16:10 場 所 新座キャンパス 対 象 15歳以上（中学生を除く）の男女
定 員 38名 受講料 無料

ホームページ作成入門

講師：本学文学部人文学科准教授 福田 博司
見本のページをコピーして、必要部分を修正するホームページ作成入門です。絵を描き、写真を撮り、マイク録音や簡単な曲などを作り、視覚障がい者や聴覚障がい者が利用できるホームページを作ります。

パソコンコース受講者特典 ●全3回、全てに出席された受講者には、公開講座修了証を発行いたします。
●今学期（平成28年9月末日まで）内に限り本学図書館を利用することができます（閲覧のみ）。

平成28年度 春期

跡見学園女子大学の
公開講座のご案内

新たな時代を迎える明治維新の変遷を学ぶ
教養コース
19世紀日本の時代転換
「近世」から「近代」へ

平成28年
5/14-5/28
毎週土曜日
＜全3回＞

高齢者・障がい者にやさしいページを！
パソコンコース
ホームページ作成入門

平成28年
5/14-7/16
毎週土曜日
＜全10回＞

身近なテーマでしっかり会話力をつけたい方へ
語学コース
英会話／中国語会話
朝鮮・韓国語会話

平成28年
5/14-7/16
毎週土曜日
＜全10回＞

幕末・維新の激変を古文書で読む
くずし字読解コース

後援／埼玉県教育委員会・新座市教育委員会

語学コース

平成28年5月14日～7月16日 毎週土曜日＜全10回＞
時 間 ①13:00～14:30／②14:40～16:10 場 所 新座キャンパス
対 象 15歳以上（中学生を除く）の男女 定 員 各クラス20名 受講料 15,000円

英会話

中級A

Developing Conversation skills through Discussion
（時間①） 講師：本学文学部人文学科助教 Paul Horness
This course seeks to develop conversation skills by exploring different topics. As it is a discussion class, students will have to basic conversation skills in order to participate. It will start with personal topics so that the course focus can be on strategies to start and build conversations. The later part of the course's topics will focus on global events so the participants can use discussions strategies with more complex topics.

中級B

Famous Americans 3
（時間②） 講師：本学兼任講師 Kevin Scott
Each lesson will look at the life, times and influence of a famous American—with weekly reading/writing assignments, listening/speaking exercises & worksheets. Students will work individually and together. They will be required to give short presentations during the last class.

中国語会話

中 級

風趣をたのしむ中国語
（時間①） 講師：本学兼任講師 李 振源
日本においても中国語にふれる機会が増えています。中国語を学んだことがあるけど、中国語の基礎をもっと固めたい。中国の文化などもっと知りたい。パワエターに書いた角度から中国語を勉強したい。習ったことを活かして中国人と交流したい。中国語検定に挑戦してみたい。こんな方ぜひ本講座に参加して語学の歳を体感し、中国理解の輪を広げてください。中国への憧れ、もっとスムーズに、もっと楽しくなるようにと掛け合います。

朝鮮・韓国語会話

中 級

楽しく学ぶ韓国語会話
（時間②） 講師：本学兼任講師 荻野 千尋
ハングル文字や発音を習得し、より会話力をつけた方を対象とした講座です。食事やショッピングなど身近なテーマに沿った会話を中心に学びます。中でも正しい発音とイントネーション、リズムに慣れることに重きを置きます。これらを身につけることは韓国の人と交流し、信頼関係を結ぶのにきっと役に立つでしょう。
※別途テキスト代（2,500円程度の予定）が必要となります。

語学コース受講者特典 ●公開講座の8割以上出席された受講者に公開講座修了証を発行いたします。
●今学期（平成28年9月末日まで）内に限り本学図書館を利用することができます（閲覧のみ）。
※語学コースの各講座の詳細内容は本学ホームページをご覧ください。

くずし字読解コース

平成28年5月14日～7月16日 毎週土曜日＜全10回＞
時 間 ①13:00～14:30／②14:40～16:10 場 所 新座キャンパス
対 象 15歳以上（中学生を除く）の男女 定 員 各クラス20名 受講料 15,000円

入門 はじめて読む古文書—江戸時代を読み解く準備—
（時間①） 講師：本学兼任講師 関口 博巨
江戸時代の古文書は、私たちの身近になくさん残っています。古文書を読めば、武士の支配、庶民の暮らし、文化や信仰などがわかります。あなたのご先祖さまも見つかるかも知れません。この講座では古文書解読の初歩を学びます。さあ、「くずし字」にチャレンジしてみよう！
※平成27年度春期とは違うテキストを使用します。

二 般 幕末・維新—江戸～東京の激変を古文書から読みとる—
（時間②） 講師：本学兼任講師 森倉 哲三
幕末維新期、江戸は権力の交替が生活の変遷をもたらします。この講座は、古文書を少しがかったことがある方を対象に（初めてでも可）、城内から市武士・町人までの激変する生活、筆文字で読み解く力をつけます。
※後日ホームページ上でお知らせする古文書字典、3,000円前後の3冊から1冊を選んでください。

くずし字読解コース
受講者特典 ●公開講座の8割以上出席された受講者に公開講座修了証を発行いたします。
●今学期（平成28年9月末日まで）内に限り本学図書館を利用することができます（閲覧のみ）。
※くずし字読解コースの各講座の詳細内容は本学ホームページをご覧ください。

申込方法 受付期間

教養コース

往復はがき、FAX、Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。

①「武蔵野の今と昔」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所
④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？
⑨次回以降の本学公開講座のご案内を希望しますか？

受付期間 8月26日(金)より受付(定員になり次第締切)

語学コース(英会話／中国語会話／朝鮮・韓国語会話)・くずし字読解コース

往復はがき、FAX、Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。

①希望講座名(例：英会話中級Aコースなど) ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所
④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧どちらで本講座をお知りになりましたか？
⑨次回以降の本学公開講座のご案内を希望しますか？

受付期間 語学コース(英会話／中国語会話／朝鮮・韓国語会話)……8月26日(金)～9月14日(水)必着
くずし字読解コース

※教養コースは、受講申込み受付後、棄権にて受講証を郵送いたします。
※語学コース及びくずし字読解コースは、応募者多数の場合は抽選となります。
※お申し込み頂いた方々の個人情報、跡見学園女子大学学務部教務課公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません(法令などにより開示を求められた場合を除く)。
※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、大学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載します。

新座キャンパスへのご案内

※地球温暖化防止のため、自家用車での来校はご遠慮ください。

●東武東上線(地下鉄有楽町線・副都心線)

「志木駅」下車 南口より西武バス約15分
「跡見女子大」下車

●JR武蔵野線

「新座駅」下車 北口よりバス約7分

●西武線
「所沢駅」下車 東口より西武バス約25分「跡見女子大」下車

＜申込・照会先＞

跡見学園女子大学
学務部教務課 公開講座係

〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL. 048-478-3340
FAX. 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
http:// www.atomi.ac.jp/univ/

跡見学園女子大学
学務部教務課 公開講座係

〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL. 048-478-3340
FAX. 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
http:// www.atomi.ac.jp/univ/

跡見学園女子大学の秋期公開講座は教養・語学とくずし字読解コース

教養コース

平成28年10月8日～11月12日(11月5日は除く) 毎週土曜日＜全5回＞

時間	13:00～14:30
場 所	新座キャンパス
対 象	15歳以上(中学生を除く)の男女
定 員	100名
受講料	無料

武蔵野の今と昔

—新座・三芳・川越—

10/8^①

講師：本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科教授 安島 博幸

明治中期、国木田独步が短編小説「武蔵野」を著すとその後いわゆる「武蔵野ブーム」が沸き起こった。その影響は、当時の風景観にばかりではなく、郊外への行楽や住宅地開発、別荘地開発などにも波及した。そして、その元を辿れば、藩政期に川越藩が行った武蔵野台地での新田開発に至る。本講座では、野火止(新座市)と三富(三芳町)の新田開発の経緯と武蔵野ブームの関係について話を進めたい。

10/15^②

新河岸川舟運と東上鉄道

講師：本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科教授 老川 慶喜

今や首都圏有数の観光地となった川越は、江戸期には新河岸川舟運で江戸と結ばれていました。明治になって鉄道の敷設が始まると、新河岸川の舟運も新たな対応を迫られました。ここでは、志木河岸で因縁問題を営んでいた井田家の動向を追いながら、東上鉄道(現在の東武東上線)が開業してくるまでの経緯を明らかにし、近世から近代への武蔵野の変容を垣間見ることにします。

10/22^③

武蔵野を自転車で楽しむ —オランダとカナダの自転車都市から学ぼう—

講師：本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 坪原 紳二

武蔵野の地には、雄木林やケヤキ並木、あるいは野火止用水などの自然的・歴史的資源が数多く残されており、しかもそれが自転車で見て回るのがちょうどよい距離内に分布しています。武蔵野、さらにはオランダとカナダで、自転車で撮影したビデオ映像を見ながら、武蔵野を自転車で楽しむための方法や課題について考えます。

10/29^④

都市農業の役割を考える —「暮らし」という観点から—

講師：本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教授 雷 理恵子

新座・志木・朝霞市一帯は、鉄道網の発達に加え、高度経済成長期以降、都市化の波が押し寄せる中、農地が急速に失われてきた。近年、都市農業の意義や役割が、再評価されつつある。生産緑地、遊楽場所の他、農村と都市の交流を通じた人間らしい暮らしや社会のあり方に注目し、都市農業の果たす役割について「暮らし」という観点から考える。

11/12^⑤

新座のまちづくり 市民力の活かし方

講師：本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 篠崎 健司

地域の問題や課題を地域住民自らが解決したり改善したりする取組が全国各地で行われています。一方で、高齢者問題はもとより子どもの貧困など、地域が抱える課題は少なくありません。みなさんのまちではどうでしょうか。市民力を育みながら、地域力として地域の暮らしを豊かにしていくための方策について考えてみましょう。

教養コース受講者特典

- 開講回数の8割以上に出席された受講者には、公開講座修了証を発行いたします。
- 今学期(平成29年3月末日まで)内に限り本学図書館を利用することができます(閲覧のみ)。

平成28年度 秋期

跡見学園女子大学の 公開講座のご案内

平成28年
10/8・11/12
11月5日は除く
毎週土曜日
＜全5回＞

平成28年
10/1・12/10
11月5日は除く
毎週土曜日
＜全10回＞

平成28年
10/1・12/10
11月5日は除く
毎週土曜日
＜全10回＞

緑豊かな武蔵野とそこに暮らす人々の背景を知る
教養コース

武蔵野の今と昔

—新座・三芳・川越—

各国の友人と親しくなれる会話を学ぶ
語学コース

英会話／中国語会話 朝鮮・韓国語会話

江戸の「コミック」や候文の手紙を読む
くずし字読解コース

共催／新座市教育委員会(教養コースのみ)
後援／埼玉県教育委員会・新座市教育委員会・埼玉まなびプロジェクト協賛事業

語学コース

平成28年10月1日～12月10日(11月5日は除く) 毎週土曜日＜全10回＞

時間	①13:00～14:30／②14:40～16:10
場 所	新座キャンパス
対 象	15歳以上(中学生を除く)の男女 定 員 各クラス20名 受講料 15,000円

英会話

【中級A】The Many Faces of British Culture
(時間①) 講師：本学兼任講師 John Oliphant

In this course we shall examine many different aspects of British life and customs. In a relaxed but hopefully stimulating learning situation we shall look at readings and extracts from British cinema. These will provide ideas for us to discuss on the origins and development of the nation's very particular culture. It is one that has intrigued and sometimes provided a model for other nations. Participants, by expanding their vocabulary, will be able to express a wider range of ideas in active conversations. Sometimes this will be in pairs and small groups. I am happy to offer advice to those who wish to follow up work we do in the class sessions, either in further grammar self-study or research on a topic of interest.

【中級B】Let's Chitchat
(時間②) 講師：未定

初めて中級レベルの英会話講座を受講される方向けのコースです。
リスニングとスピーキングのスキル向上を目指して、ペアやグループで練習します。
希望によっては、趣味や観光などのテーマ別会話を取り上げる予定です。

中国語会話

【中 級】風趣を楽しむ中国語
(時間①) 講師：本学兼任講師 李 振漢

中国語の基礎を固めながら、もっと中国の文化などを知り、バラエティーに富んだ角度から中国語を理解しましょう。それを活かして、中国人と交流したらもっといい効果が出るはず。中国語検定にも挑戦して、中国理解の輪を広げましょう！

朝鮮・韓国語会話

【中 級】話してみよう韓国語
(時間②) 講師：本学兼任講師 荻野 千尋

ハングル文字や発音を習得し、より会話をしたい方を対象とした講座です。
自己紹介や身近な話題を通じて、韓国の人々と親しくなる会話を学びます。
発音やイントネーション、リズムも気を配りながら、韓国語のブラッシュアップを目指していきます。

くずし字読解コース

平成28年10月1日～12月10日(11月5日は除く) 毎週土曜日＜全10回＞

時間	①13:00～14:30／②14:40～16:10
場 所	新座キャンパス
対 象	15歳以上(中学生を除く)の男女 定 員 20名 受講料 15,000円

【入門】はじめてのくずし字 —江戸のコミックと藤栗毛—
(時間①) 講師：本学兼任講師 二又 淳

江戸時代の本を原文で読んでみたい、そのような方のための入門コースです。
仮名の基礎を学んだ後、絵入りのコミック本(青表紙)と笑いにあふれた有名な「藤栗毛」(続編)を実際に読んでみます。初めて仮名を覚えた幼少期に帰ったつもりで、楽しく習得していきます。

【二 般】書簡文のくずし字 —男性書簡文の基礎と発展—
(時間②) 講師：本学文学部人文科学教授 岩田 秀行

くずし字解読の能力をさらに高めたい、そのような方のための一般コースです。
入門が終わった方が対象となります。くずし字解読の力をアップさせるには、書簡文は最適です。戦前までは当たり前だった、縦文の基本文型を学び、くずし字の世界に分け入りしましょう。

くずし字読解コース

平成28年10月1日～12月10日(11月5日は除く) 毎週土曜日＜全10回＞

時間	①13:00～14:30／②14:40～16:10
場 所	新座キャンパス
対 象	15歳以上(中学生を除く)の男女 定 員 20名 受講料 15,000円

【入門】はじめてのくずし字 —江戸のコミックと藤栗毛—
(時間①) 講師：本学兼任講師 二又 淳

江戸時代の本を原文で読んでみたい、そのような方のための入門コースです。
仮名の基礎を学んだ後、絵入りのコミック本(青表紙)と笑いにあふれた有名な「藤栗毛」(続編)を実際に読んでみます。初めて仮名を覚えた幼少期に帰ったつもりで、楽しく習得していきます。

【二 般】書簡文のくずし字 —男性書簡文の基礎と発展—
(時間②) 講師：本学文学部人文科学教授 岩田 秀行

くずし字解読の能力をさらに高めたい、そのような方のための一般コースです。
入門が終わった方が対象となります。くずし字解読の力をアップさせるには、書簡文は最適です。戦前までは当たり前だった、縦文の基本文型を学び、くずし字の世界に分け入りしましょう。

教養コース受講者特典

- 開講回数の8割以上に出席された受講者には、公開講座修了証を発行いたします。
- 今学期(平成29年3月末日まで)内に限り本学図書館を利用することができます(閲覧のみ)。

公開講座ダイジェスト 2016
跡見学園女子大学公開講座の記録

平成 29 年 3 月発行

発 行 跡見学園女子大学

〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2

電話 03(3941)7420

FAX 03(3941)8333

E-mail d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp

URL <http://www.atomi.ac.jp/univ/>
